

2020 年度 姫路市 大学発まちづくり研究助成プロジェクト成果報告書

名古屋山霊苑の歴史的価値の検証と現代的意義の  
再発見プロジェクト



関西国際大学 地域総合研究所 名古屋山霊苑活用研究グループ

橘セツ・小磯学・高根沢均



## 目次

はじめに .....	1
研究目的と研究方法	
実施した調査	
第 1 章 名古屋山霊苑の概要〔小磯 学〕 .....	3
第 2 章 「墓地公園 Garden Cemetery」としての名古屋山霊苑〔小磯 学〕 .....	8
第 3 章 名古屋山霊苑に関するアンケート調査と分析〔高根沢 均〕 .....	25
総括〔小磯 学・高根沢 均〕 .....	59
謝辞 .....	61



## はじめに

本書は、2020年度 姫路市大学発まちづくり研究助成プロジェクトとして実施した「名古屋山霊苑の歴史的価値の検証と現代的意義の再発見プロジェクト」の成果報告書である。姫路市からの依頼を受け、関西国際大学地域総合研究所に名古屋山霊苑活用研究グループを結成し、橋セツ・小磯学・高根沢均の3名が2020年8月から2021年2月にかけて研究調査を行った。

2020年春先に構想した研究内容が承認されたのは7月であったが、収束の見えないコロナ禍の中、当初予定していた日本各地の仏舎利塔の代表例の現地調査（北海道など）は実施できなかったことは残念でならない。結果として、その起源がインドにまで遡る仏舎利塔の表象および建築的な形態、そして戦後から続く仏舎利塔建立運動と名古屋山霊苑仏舎利塔との関係に関する調査も道半ばとなり、本報告書には掲載できなかった。また、研究代表の橋が2020年末に体調を崩し、その後現在に至るまで治療に専念しており、本報告書に掲載予定だった担当章も抜けたままとなってしまった。これらの不足分については、引き続き研究と考察を進め、メンバーが個別に論考を投稿する形で補っていく所存である。誠に勝手ながら、ご了承頂けると幸いである。

## 研究目的と研究方法

本プロジェクトの研究目的は、墓地公園としての名古屋山霊苑の歴史的価値の検証とその現代的意義の再検討を行い、墓地にとどまらず公園としての今後のさらなる活用・利用促進についての提言を行うことである。その実現に向けて、本研究においては下記の3つのテーマを設定した。

### 〔目的1〕「墓地公園」としての名古屋山霊苑の検証

- ・ 墓地公園とは何かを明確にするため、その歴史と理念の検証を行う。
- ・ 名古屋山霊苑が「墓地公園」としてどのように位置づけられるかを検討する。

方法：名古屋山霊苑の現地調査、及び文献調査

### 〔目的2〕名古屋山霊苑仏舎利塔の歴史的価値の検証と同時代的意義の検証

- ・ 起源地のインドから東・東南アジアに広がった仏舎利塔の歴史的背景とそのシンボリズムを明らかにし、名古屋山霊苑仏舎利塔の歴史的価値と今日における意義について検証する。

方法：日本各地の主な仏舎利塔の現地調査・聞き取り調査とともに、仏舎利塔建立を日本・世界で精力的に進めた藤井日達上人（1885－1985年）に関する聞き取り調査、及び文献調査。ただし本目的については、上述したように論考を別途発表する。

〔目的 3〕 名古屋山霊苑に関する人々の認知度、利用目的、イメージ etc. の検証

・ 名古屋山霊苑についての一般の人々の理解や利用状況などを明らかにする。

方法：アンケート調査・・・路上（場所：名古屋山霊苑、姫路駅前、姫路城）

オンライン（対象：姫路市職員の方々）

### 実施した調査

2020-21年にかけて、下記の日程で各調査を実施した。

6月22日、8月13日：名古屋山霊苑管理事務所での打合せ・霊苑見学

9月3、17、21日：名古屋山霊苑管理事務所所蔵資料の撮影

9月8-10日：仏舎利塔・藤井日達上人についての現場検証・聞き取り調査

覚王山日泰寺（名古屋市）、日本山妙法寺 渋谷道場（渋谷区）、

富士仏舎利塔（御殿場市）、妙光山感應寺（御殿場市）、

愛鷹山仏舎利塔（御殿場市）

9月17日：石見利勝氏（前姫路市長）への聞き取り調査

9月21日：福井孝幹氏（名古屋山霊苑管理事務所 元所長）及び

桑垣末男氏（同 元職員）への聞き取り調査

12月28、29日、1月4日：アンケート調査@姫路駅前、名古屋山霊苑、姫路城

12月24日-1月10日：オンラインアンケート調査（対象：姫路市職員）

## 第 1 章 名古屋山霊苑の概要〔小磯 学〕

1954（昭和 29）年に開苑した名古屋山霊苑は、姫路城西方約 1km に位置する名古屋山（標高 42m）のほぼ全面を覆う 29.4ha（甲子園球場 3.85ha の約 7.6 倍）の敷地に宗派を越えた 30,942 基の墓石・墓碑（平成 25 年 3 月 31 日現在。姫路キリスト教会、カトリックの墓石を含む）を安置する（図 1）。



図 1 名古屋山霊苑と仏舎利塔

また、中央に聳える高さ約 38m の仏舎利塔をはじめ、香炉堂、4 つの納骨堂、古代インドの像を模した仏像や菩薩像を祀る石仏堂、1869 年（明治元年）の戊辰戦争以来の戦没者を祀る複数の碑や室町時代の名古屋城主那胡七十郎頼三の碑、消防の碑などの多数の碑、さらに楠谷池を囲む緑地や名古屋遺跡弥生式住居跡、2016（平成 28）年に保存のため移された辻井廃寺跡礎石、展望台<sup>1</sup>などが位置していることが特徴となっている。このほか多数の植樹や花壇、遊歩道が整備され、姫路城・手柄山中央公園・書写山と並び、当初から「一大観光地としてもまた全国にその名をとどろかす」墓地公園として「観光姫路」の新しい顔をつくりあげてきた<sup>2</sup>。

この名古屋山霊苑の設置が、姫路市初代公選市長として戦後復興期の 21 年間（1946／昭和 21－1967／昭和 42 年）を支えた石見元秀氏（図 2）<sup>3</sup>の発案によるものであったことはよく知られている。それは第 2 次世界大戦（太平洋戦争）終結後の戦災復興整備事業（失業対策事業を含む）であるとともに、姫路市民の保健や遊楽のための厚生慰安施設として、また防災施設として公園・運動場・公園道路・その他の緑地を設ける計画に端を発している。

この整備計画のなかで、姫路市街地にある寺院附属墓地を郊外の指定墓苑へ一括して移転する必要が生じた際に、その適地として旧陸軍墓地がある名古屋山が選定された。当初は、現在の霊苑全体の 1 割に満たない土地に旧陸軍墓地<sup>4</sup>、市営墓地、姫路少年

刑務所墓地などがすでにあったが、丘陵を段状に大規模に造成し、墓石はその各段に  
一列だけ置くようにした。そのためどの地点も眺望がよく、それまでの一般的な平地  
の墓地のように墓石が密集して立ち並ぶ圧迫感がない設計となっていた。また将来的  
な車での墓参を想定して、霊苑内に中央幹線道路と循環道路も設置された<sup>5</sup>。



図2 新制姫路市公選初代市長 石見元秀氏

在職期間：1946（昭和21）－1967（昭和42）年  
（21年間）

こうして1951（昭和26）年に起工し、翌年に都市計画墓地第1号「名古屋山墓地」  
として定められ、1954（昭和29）年に「名古屋山霊苑」として開苑している。またイン  
ドのジャワーハルラール・ネルー（ネール）首相から贈呈された仏舎利を納めた仏舎  
利塔が1960（昭和35）年に完成した<sup>6</sup>。

この仏舎利塔の内部の天井部分には釈迦の一代記が極彩色で描かれるとともに、聖  
徳太子や日本仏教史上の著名な高僧6名の像、さらに日光・月光菩薩像などを配して  
いる。さらに仏舎利塔の外側を囲む4隅には納骨堂や石仏堂を置くことで「単なる仏  
塔としてではなく観光的価値も付加」<sup>7</sup>し、観光名所として位置づけることに力が注が  
れていることが大きな特徴となっている。

石見氏本人の言葉によれば、名古屋山霊苑を整備した目的とは、それまでの墓地のイ  
メージが「あまりにも陰惨な影に覆われ、如何にも死後のみじめさを象徴している」  
ためにこれを打ち壊し、「死後もまた楽しいというイメージに変えたいという切なる  
念願」を具現化することであった。すなわち「春は花、秋は紅葉に色どられ、四季お  
りおりに小鳥のさえずる広々とした、明るい、綺麗な公園に中に納められ、墓前では  
一家揃って、ご先祖様と共に桜の下で会食閑談も出来る雰囲気になれば、イメージは  
全く変わり死後もまた楽しいということになる。そしてまた中央の仏舎利塔は「人類  
永遠の福祉と平和楽土の建設を祈願する」場であり、「現世に極楽浄土の楽園」をつく  
ることこそが理想となっていた。

こうした墓地公園としての名古屋山霊苑とともに手柄山中央公園<sup>8</sup>の整備をも手掛け



た石見氏は「公園市長」とまで呼ばれ、これらの公園の造成によって姫路を人々に潤いと安らぎを与える魅力ある町とすることに大きく貢献した<sup>9</sup>。

名古屋山霊苑はまた、1966（昭和41）年に地方博の嚆矢とされる姫路大博覧会が開催された際には、手柄山中央公園（メイン会場＝1956年建立の太平洋戦全国戦災都市空爆死没者慰霊塔周辺に19のパビリオンや回転展望台が設置された）と姫路城大手前公園（城南会場）とともに3会場のひとつともなった。64日間の会期中には3会場に合計171.5万人の来場者が訪れ、成功裡に終えている<sup>10</sup>。

こうした経緯もありその認知度が高まった名古屋山霊苑は、「兵庫県観光百選地」（1966年、兵庫県施行100年記念として認定）や「ひょうご風景100選」（1986年、朝日新聞社）にも選ばれ、墓地であるとともに姫路市の観光名所のひとつとして今日に受け継がれている。



図3 名古屋山霊苑（平面図）

注

- 1 名古屋山霊苑協会『50年のあゆみ 名古屋山霊苑協会 創立五十周年記念誌』、2014年、名古屋山霊苑協会。また展望台は、平成6年(1994年)に姫路市民への公募によって「姫路城十景」のビューポイントのひとつに選ばれている(姫路城「世界遺産姫路城十景 案内」、2014年、<<https://castle-himeji.com/himejijo-10views/>> (2021年2月22日参照)。
- 2 姫路市役所調査課「環境すぐれた憩いの場 名古屋山墓苑開苑式挙行」『広報ひめじ』、1954(昭和29)年4月10日、p.1; 姫路市役所調査課「完成せまる仏舎利塔」『広報ひめじ』、1960(昭和35)年3月25日、p.1; 名古屋山霊苑協会『50年のあゆみ 名古屋山霊苑協会 創立五十周年記念誌』、2014年、名古屋山霊苑協会; 播磨時報社(編)『愛郷のひと 石見元秀』、1986年、名誉市民故石見元秀氏顕彰碑建立会、p.115。
- 3 市長公室 <<https://web.archive.org/web/20160610104945/http://www.city.himeji.lg.jp/var/revo/0076/8798/3-koushitu.pdf>> (2021年2月22日参照)。
- 4 戦後に旧軍用地を都市緑地として指定するよう当時の戦災復興院が方針を出しており、旧陸軍の墓地・軍用地が民間の墓地・公園に転用された例は姫路(名古屋山霊苑)のほか、名古屋(新出来公園)や広島(比治山公園、高高原墓園)などの戦災都市にも見ることができる(今村洋一「戦災復興計画における旧軍用地の転用方針と公園・緑地整備について」『日本都市計画学会 都市計画論文集』、2009年、44(3):表-2)。
- 5 播磨時報社(編)『愛郷のひと 石見元秀』、1986年、名誉市民故石見元秀氏顕彰碑建立会、pp.88。
- 6 名古屋山霊苑協会『50年のあゆみ 名古屋山霊苑協会 創立五十周年記念誌』、2014年。
- 7 播磨時報社(編)『愛郷のひと 石見元秀』、1986年、名誉市民故石見元秀氏顕彰碑建立会、p.88; 名古屋山霊苑協会『50年のあゆみ 名古屋山霊苑協会 創立五十周年記念誌』、2014年、名古屋山霊苑協会。
- 8 手柄山中央公園はもともと1942(昭和17)年に開設されたが、石見氏の功績によって太平洋戦全国戦災都市空爆死没者慰霊塔が建立されるに伴って新たな公園計画が整備されていくことになった。厚生会館、野球場、陸上競技場などの体育施設のほか、周辺には水族館、図書館、野外音楽堂、青年の家、婦人会館などの社会教育施設やその後の老人ホームの嚆矢となる養寿園が設置され、1960(昭和35)年に完成している(播磨時報社(編)『愛郷のひと 石見元秀』、1986年、名誉市民故石見元秀氏顕彰碑建立会、pp.68-69)。
- 9 清和会(編)『戦後二十一年に亘る姫路市政と石見元秀氏の思い出を語る』清和会(非売品)、1970年、pp.76-77; 播磨時報社(編)『愛郷のひと 石見元秀』、1986年、名誉市民故石見元秀氏顕彰碑建立会、pp.68-69、87-89、114-115; 姫路市史編集専門委員会(編)『姫路市史』第13巻下 史料編 近現代3、2020年、p.297。
- 10 名古屋山霊苑では宗教美術館と人間魚雷「回天」を展示した回天館が展示館となった(姫路市史編集専門委員会(編)『姫路市史』第6巻 本編 近現代3 姫路市、2016年、pp.552-556; ひめじラボ「姫路で万博!? 昭和41年の大博覧会を調べてみた! モノレール手柄山駅⇄姫路駅も」<<https://himeji-lab.com/expo-monorail/>> (2021年2月22日参照))。また姫路大博覧会の開催は、1964(昭和39)年に姫路城の昭和の大修理が完成したことを記念することがその発端ともなっている(姫路市史編集専門委員会(編)『姫路市史』第6巻 本編 近現代3、2016年、p.553)。合計171.5万人会場別内訳は、以下の通りだった。手柄山会場=100.9万人(58.9%)、城南会場=52.7万人(30.7%)、名古屋山会場=17.9万人(10.4%) (姫路市史編集専門委員会(編)『姫路市史』第6巻 本編 近現代3、2016年、p.553)。

図出典

図1 名古屋山霊苑と仏舎利塔(筆者撮影)

図 2 新制姫路市公選初代市長 石見元秀氏：

名古屋山霊苑協会『50年のあゆみ 名古屋山霊苑協会 創立五十周年記念誌』、2014年、p.22。

図 3 名古屋山霊苑（平面図） 名古屋山霊苑 <[https://nagoyamareien.com/?page\\_id=231](https://nagoyamareien.com/?page_id=231)>

引用・参考文献（ウェブサイトはいずれも 2021年2月22日参照）

今村洋一（2009）「戦災復興計画における旧軍用地の転用方針と公園・緑地整備について」『日本都市計画学会 都市計画論文集』、44（3）：817－822

清和会（編）（1970）『戦後二十一年に亘る姫路市政と石見元秀氏の思い出を語る』清和会（非売品）

市長公室 <<https://web.archive.org/web/20160610104945/http://www.city.himeji.lg.jp/var/rev/0076/8798/3-koushitu.pdf>>

名古屋山霊苑協会（2014）『50年のあゆみ 名古屋山霊苑協会 創立五十周年記念誌』名古屋山霊苑協会  
播磨時報社（編）（1986）『愛郷のひと 石見元秀』名誉市民故石見元秀氏顕彰碑建立会

姫路市史編集専門委員会（編）（2016）『姫路市史』第6巻 本編 近現代3 姫路市

姫路市史編集専門委員会（編）（2020）『姫路市史』第13巻下 史料編 近現代3 姫路市

姫路市役所調査課（1954年／昭和29年4月10日）「環境すぐれた憩いの場 名古屋山霊苑開苑式  
挙行」『広報ひめじ』 p.1。

姫路市役所調査課（1960年／昭和35年3月25日）「完成せまる仏舎利塔」『広報ひめじ』 p.1。

姫路城（2014）「世界遺産姫路城十景 案内」、<<https://castle-himeji.com/himejijo-10views/>>

ひめじラボ（2021.2.9）「姫路で万博!? 昭和41年の大博覧会を調べてみた！モノレール手柄山  
駅⇄姫路駅も」<<https://himeji-lab.com/expo-monorail/>>

## 第 2 章 「墓地公園 Garden Cemetery」としての名古山霊苑〔小磯 学〕

### 2.1 はじめに

日本初の「墓地公園」となったのは、1923（大正 12）年に開園した東京の多磨霊園である。その開発の要因となったのは、18－19 世紀の欧米と場合と同じく、市街地の急速な人口増大とその結果生じた墓地不足という新しい社会情勢であった。その後第 2 次世界大戦中の空爆によって甚大な被害を被った市街地は、戦後の復興事業に伴い墓地のさらなる郊外への移転・新墓地開発を余儀なくされることになった。

新制姫路市公選初代市長となった石見元秀氏は、墓地公園として構想した名古山霊苑を 1954（昭和 29）年に開苑させ、戦後の日本の新墓地開発のモデルケースともなった<sup>1</sup>。石見氏が市長として先見の明に長け、卓越したアイデアと抜群の実行力を兼ね備えた類稀な人物であったことは紛れもない事実である。ただ氏が構想するに至った背景には、欧米の産業革命に遡る墓地公園の長い歴史もあった。

石見氏が墓地公園の構想を培った背景には、市長就任時の海外視察・外遊時に直接見聞した現地の事例や収集した情報に依るところが大きかったと考えられる。石見氏がいつ・どこを訪れたかの正確な情報の入手は本研究では残念ながら叶わなかったが、氏がとくに欧米を度々訪問していたことはよく知られており、簡単ながらその記述を確認することはできる<sup>2</sup>。また第 2 次世界大戦後のおよそ 20 年間は、戦場となり多くの都市部が破壊されたヨーロッパの国々にとっても日本と同様に戦後の復興期であり、都市における緑地・公園、そして墓地空間のあり方が改めて見直されていた時期でもあった。

以下では墓地公園の特徴とともにその歴史的背景について振り返り、それを踏まえた上で改めて墓地公園としての名古山霊苑についての検証を試みる。

### 2.2 墓地公園とは

墓地公園（公園墓地、庭園墓地、墓園、霊苑、風景霊園、森林墓地、自然墓地などとも呼ばれる）の歴史は産業革命が起こったヨーロッパにまで遡り、今日なお都市開発・計画の重要な要素として位置づけられている。

日本全土でおよそ 86.4 万ヵ所（2015 年度）ほどある墓地<sup>3</sup>は、それを維持管理・運営する経営主体に基づいて 5 つに、またその形態に基づいて 3 つに下記のように分類されている<sup>4</sup>。

経営主体に基づく分類：

- ① 寺院墓地＝寺院が運営する通常は境内にある墓地で、主に檀信徒契約を結んだ家の墓であることが前提。

- ② 村落墓地＝墓地や埋葬等に関する法律が制定される以前から、村落の住民らに共有され設置されていた墓地。各地にはこうした墓地の多くが、そのまま認められ継承されている。
- ③ 個人墓地＝墓地や埋葬等に関する法律が制定される以前から、私有地内に設けられていた墓地。各地にはこうした墓地の多くが、そのまま認められ継承されている。
- ④ 公営墓地＝都道府県や市区町村などの自治体が運営する墓地。
- ⑤ 民営墓地＝民間の公益法人（財団・社団法人）あるいは寺院境内以外に宗教法人が経営する墓地。「事業型墓地」とも呼ばれる。

形態に基づく分類：

- ① 墓地公園＝墓地全域に樹木や草花を植え、散策できる小道や休憩所や噴水などを設置し、全体をあたかも公園のようにした墓地。
- ② 芝生墓地＝芝生を敷き詰めた地域に、高さが低く横に長い様式の墓石を建てた墓地で、ヨーロッパやアメリカに多い
- ③ 立体墓地＝一定の空間・建物内に墓地を集散的に納めた施設。上記の墓地公園内の一部にこうした施設が設置されている場合もある<sup>5</sup>。

このように墓地公園は、その登場以前に遡る寺院墓地や村落墓地など经营主体に重点が置かれた墓地（立地・外見的特徴も当然ながらそこには反映されてもいるが）と異なり、形態・外観に基づく呼称であることがわかる。

墓地公園の特徴としては、以下が指摘されている<sup>6</sup>。

- ① 庭園的な構想の内に区割、通路、広場と、それに沿って樹林、芝生、花園が配置される。
- ② その内に大小各種の葬地、その他の施設を配置し、美しい施設そのものが庭園的な構成要素となっている。
- ③ 葬地利用面積を3割程度（従来の墓地は6割）とし、7割程度が装景のために使われている。
- ④ 美しい樹林や地形の起伏はすべて風景的に利用している。
- ⑤ 個々の墓所の設計や墓石・墓碑の形態その他関連施設が、墓地内の修景に一要素として統制されている。

### 2.3 墓地公園とその歴史

ここでは、墓地公園が誕生したヨーロッパとアメリカの事例を簡潔に概観する。



(1) フランス 墓地公園を振り返ると、その歴史は 1804 年に皇帝に就いたナポレオンの下で建設されたパリ市営ペール・ラシェーズ墓地（正式名称：東墓地）にまで遡る（図 1）。パリ市の東部 20 区に位置する面積 44ha（甲子園球場の約 11.4 倍。）はパリ市内最大の規模で、木々に囲まれた緑豊かで美しい敷地には荘厳な彫刻を施したり廟と呼べるような建物状の墓が多く、全体で 70 万基の墓石・区画に 100 万人以上が埋葬されている<sup>7</sup>。数百人の歴史上の著名人らの墓もあり、今日では世界中から年間 350 万人が訪れ「世界で最も有名な墓地」あるいは「最も訪問者の多い墓地」と呼ばれる観光地にもなっている<sup>8</sup>。

この観光地としてのペール・ラシェーズ墓地は、19 世紀半ばにはすでに確立していた。この墓地は、それまでのキリスト教世界ないしはヨーロッパ社会に浸透していた人々の「死」に対する観念を根本的に変えてしまった画期となる施設でもあったという。それまでの「死」や「墓地」に対する観念とは、遺体が腐乱していくおぞましい即物的な現象とそれが埋葬された場所という穢れの象徴にほかならなかった。しかしペール・ラシェーズ墓地は、そこが自然豊かな美しい景観の中に死者の記念碑が安置され安らかな死後が保証された場所であることを、初めて示すことになった。

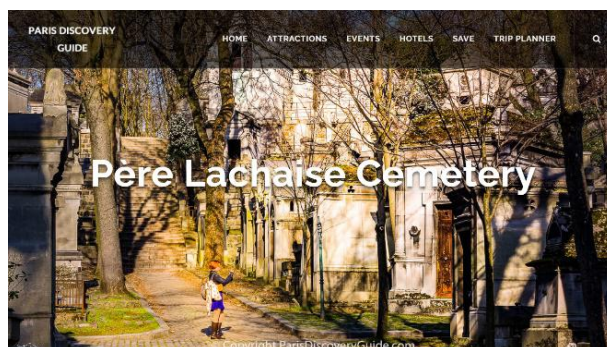


図 1 ペール・ラシェーズ墓地

フランスでは（また同様にヨーロッパ各地では）、すでに 1740 年代頃には市街地各地に散在する教会墓地が飽和状態となっていた。そのため、衛生上（同時にまた穢れ）の問題から、また死者に対する冒とくという意味合からも、生者と死者が隣接するそれまでの生活のあり方に聖職者、科学者、医者、建築家、法律家らが疑問を呈するようになった。当時の病院や牢獄、屠殺場もまた同様の対象と見なされている。1790 年以降はパリ市（中心部）での埋葬が法律で禁止され、墓地は郊外（人口が増加し市域が拡大した今日の市の周縁部）への移転を余儀なくされることになる。結果として、都市の中心部はその景観に手が加えられ、外見が統一された建物に縁どられた街路とそれらによって結ばれたいくつもの広場、清潔な噴水、橋、合理的な排水システムな

どが整備されていった。郊外に新たに作られた墓地も同様に、適度な緑に囲まれつつも随所に設けられた広場が清潔で幅広い道で結ばれた公園のような景観をもつことが理想とされ、形作られていった。幅広い道は風の通り道でもあり、細菌学的な知識が未発達だった当時は、風こそが穢れた瘴気を吹き流すと考えられたのである。

またペール・ラシェーズ墓地は共同墓地として、その開設時から特定の宗教や宗派に限定されることなく利用を受け容れている。これは「宗教や人種に関わることなく、すべての市民は墓に埋葬される権利を有する」としたナポレオンの意志による。そのためキリスト教徒のほかユダヤ教徒とイスラーム教徒の墓域を各々1810年と1856年に開設している。しかし1881年にはこうした宗教ごとの区域を設けることが廃止され、さまざまな宗教の信徒の墓が隣接することになった。そのため今日では、キリスト教、ユダヤ教、イスラーム教、仏教、ヒンドゥー教、道教、ゾロアスター教、心霊主義やその他の信仰、また無宗教といった各々の信徒の墓を、区域に制約されることなく見ることができる<sup>9</sup>。これらの通常の墓石のほか、1848年の2月革命の死者の墓碑や2つの世界大戦の戦没者碑などの慰霊碑が設置されている<sup>10</sup>。また1894年にはフランス初の（今日でもパリで唯一の）火葬場（兼納骨堂）が設置され、1887年に法律上正式に火葬が解禁されると、1889年に最初の火葬が執り行われている<sup>11</sup>。

こうした新しいコンセプトの墓地として整備されたペール・ラシェーズ墓地は、19世紀半ば頃になると、パリ観光の際には真っ先に訪れる場所として人気と知名度を誇ったという。それはヨーロッパで初めての墓地公園の誕生でもあり、アメリカを含む欧米圏全域の墓地の新しいモデルケースとなった。さらにとくに19世紀の複数の文学作品や20世紀後半以降の複数の映画や小説、テレビドラマ、ビデオゲームのロケ地やコンテンツに利用されるなど、その景観が非常に高く評価され、それが多くの観光者が訪れる要因にもなっている<sup>12</sup>。

(2) イギリス イギリスではすでに1711年に建築家クリストファー・レンが、遊歩道をめぐらし樹木や花を植えた景観を重視し、各々の墓石へのアクセスを考慮した墓地の提唱を行っている。ただしそれが現実化するのには、ロンドン都市部周縁に「偉大なる7つの墓地“Magnificent Seven”」と称されたペール・ラシェーズ墓地をモデルとした7つの墓地公園が設置されていった1830年代以降のことである。都市部に47ヵ所あった墓地が満杯になるとともに、近隣住民が腐敗した死体から出るガスや病原菌によって健康を脅かされていることが、こうした新たな墓地公園の需要を促した。設置された墓地は文字通り「イギリス版ペール・ラシェーズ墓地」と位置づけられ、死者の埋葬場所として相応しい美しく平和な風景であることが求められた。またこれらの墓地の中には、王室関係者も埋葬されていることから格式が高いとされ「墓地の

中の貴族“The Aristocrat of Cemeteries”）と呼ばれ、さまざまな鳥や野生動物の生息地としても知られるケンザル・グリーン墓地（約 29.1ha＝甲子園球場の約 7.6 倍）（図 2）も含まれている<sup>13</sup>。



図 2 ケンザル・グリーン墓地

さらに、彫刻や碑文で装飾された墓石にはそれを見たり読んだりする訪問者を教化・啓蒙する作用があり、こうした共同墓地には「公園や植物園の機能を代替する文化施設」としての機能が求められていたことが指摘されている<sup>14</sup>。

(3) ドイツ ドイツにおいても 18 世紀後半以降になると都市拡大と衛生上の問題解決のために墓地が整備され始めた。日本と異なり遺灰を自宅に持ち帰り所持することが禁止されており、残された遺族が故人への思いを直接受けとめその存在を物理的にも感じ取る場所は墓地であるという。そして墓地は都市機能の外ではなくその中＝生活圏の中に組み込まれた、緑豊かな区域として重視されている。すなわちそこは埋葬された人々とその関係者らの悲しみの場であるだけでなく、一般に開放され静寂が保たれた癒しの場であり、日々の散歩道、人々の内省の場、自己回復の場として意識されている。そのためドイツで新しく墓地が作られる際には、そこが死者を埋葬する場所であるとともに、公園という公的な役割を果たすものとして設計されることが前提となっている<sup>15</sup>。

(4) アメリカ 都市の人口増加に伴う墓地の過密化の回避と公衆衛生の観点から、1830 年代以降になるとアメリカでも墓地改革が急務となり、「田園墓地 Rural cemetery」「農村公園墓地 Rural garden cemetery」などと呼称された。樹木や花を植え自然の景観を取り入れる点はイギリスの墓地公園を範としたが、それを超える観念に基づく墓地として公園ではなく「田園」を冠したという<sup>16</sup>。

田園墓地の起源となったのは、教会や自治体ではない自発的結社による民間の墓地として 1831 年にボストン郊外に造営されたマウント・オーバーン墓（約 70ha＝甲子



園球場の約 18.2 倍。9.3 万基の墓がある）である。敷地内の丘や池、林に張り巡らされた総延長 17km 以上の小道沿いには、700 種以上・5500 本以上のハーブ類を含む多種多様な樹木（一般名称・学名を記したラベルを付記。一部は 19 世紀に植樹されたもの）で覆われている。とくに中流・上流クラスの人々の墓地として好まれ、著名人の墓も多い。こうしてヨーロッパの墓地公園と同様に、陰気な場所であった墓地から美しい自然庭園へと生まれ変わり、観光スポットにもなっていた。

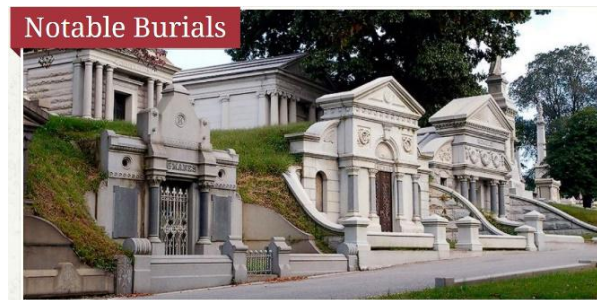


図 3 ローレル・ヒル墓地の「億万長者通り」

同じくアメリカの田園墓地を代表する 1836 年に設立されたフィラデルフィアのローレル・ヒル霊園（29.9ha＝甲子園球場の約 7.8 倍。1.1 万カ所の家族用区画と 3.3 万基の墓がある）（図 3）では、1848 年に 3 万人だった訪問者が 1860 年には外国人を含む 14 万人にまで増加し、「ここは墓地というより遊び場のようだ」、「この美しい墓地を一目見ただけで、死を願う気持ちにさえさせられる」といった当時の感想も残されている<sup>17</sup>。

田園墓地は、当初から遺族や墓参者だけでなく、そこを散策する一般の人々（大人だけでなく子供を含む）を対象に設計されていた。美しい自然に彩られた墓地とその道は「公共の散策の場所 places of public promenade」であり、レクリエーション＝精神的・肉体的な再生のための散策の場であった。そして「死者を弔うことよりも私的な瞑想をする」ことが奨励されもした<sup>18</sup>。こうしたアメリカの田園墓地は、さらに「聖地」としての性格を一層強く持つことになったという。その経緯は以下の通りである<sup>19</sup>。

植民地時代のアメリカでは、墓地は町の中心部の教会に隣接していたことから日々の生活圏の一部を占め、世俗的空間の延長としてとくに神聖な場所という意識がなかった。しかし都市が拡大し商業地の開発のために墓地が移転を余儀なくされると、田園墓地の推進者らは墓地を永久に所有することが不可欠と考え、自発的結社による所有と管理が必要不可欠となった。そして移転後の墓地は特定の宗派に制限されることなくすべての人々に利用が解放されたものの、一方で宗派を越えた「神の承認」が前

提にされることになった。独立宣言などアメリカは多くの公文書に「神・創造主」への言及を記すことが多いが、田園墓地の場合にも「神聖な目的に捧げられた」墓地であることが法的にも謳われたのである。「聖地」であるため、税金も免除された。

「聖地」化は、当時の社会に席卷しつつあった商業主義という新しい価値観とは真逆の空間を田園墓地に託した結果でもあった。それは「新興国アメリカを推進する文明の力のいわばアンチテーゼとしての延々の価値を反映した「聖地」であり、「都会に住む人々が都市の外れまでやってきて現実的な世界から、聖なる世界にスムーズに入っていく具体的な仕切りの機能をはたしていたと考えられるのである」<sup>20</sup>。

この「聖地」のイメージ造りのためには、墓地選定の際にあらかじめ川や丘などの地形的な特徴が十分に考慮された。喧噪が絶えない町と隔てられた土地の変化に富んだ起伏ある地形、そしてそこから臨むことができる眺望が、理想の具現化として多くの田園墓地に共通する特徴ともなっている<sup>21</sup>。

ただこうしたアメリカの田園墓地の雰囲気・特性は、ヨーロッパのペール・ラシェーズ墓地などとは異なるものであったらしい。1830年代にアメリカを訪れたイギリス人女性の記録によれば、ペール・ラシェーズ墓地では「弔いのあらゆる表現が見出されるものの希望は全くない」のに対し、ボストンのマウント・オーバーン墓地は「未来の輝く光以外何もない」「創造の聖地」であり「生命の約束に満ちている」という<sup>22</sup>。新生国家にふさわしく、希望に満ちた再生の場として受け止められたようである。このように「聖地」としてのアメリカの田園墓地は、ヨーロッパと異なる固有の個性を保ちつつも、その建国初期における観光活動の発展という点からも重要な場所となっている。

(5) 日本：第2次世界大戦前 日本では6世紀の仏教伝来以降、火葬が徐々に広まっていったが、実際にそれが庶民に浸透したのは江戸時代の末であったという。しかし火葬場の煙や臭いへの反発、またそれまで続いていた神仏習合に対し神仏分離の考えが広がったことから1873(明治6)年に火葬禁止令が出されている。しかし日本はすでに欧米と同様に都市部への人口集中と市街地化が進み土葬場所の確保が困難な状況を迎えたことから、早くも1875(明治8)年にはこれが廃止されている<sup>23</sup>。それでもなお、1919(大正8)年には当時の東京市内の5つの公営墓地のすべてで新たに墓を設ける場所が無くなる事態に追い込まれ、郊外に新たな墓地の設置が必要になった。それが冒頭で触れた日本初の墓地公園となった多磨霊園(128ha=甲子園球場の約33.2倍)(図4)である。

多磨霊園の計画案は東京市公園課長で造園家・技師だった井下清氏が欧米の墓地公園を視察・参考にした上で作成し、これに基づく造園作業開始から1年足らずの1923

(大正 12) 年 4 月に開園している<sup>24</sup>。その立地場所が選ばれたのは、当時はほぼ未開地であったこととともに、中央線や京王電気軌道(現在の京王電鉄)、多摩鉄道(現在の西武多摩川線)などに隣接し交通の便が良かったことによる。



図 4 多磨霊園

日本では明治以来、都市のあらゆる公共施設が西洋文化の流入によって大きな影響を受けつつ、日本古来の要素をほどよくブレンドしてきた。墓地については「祖先を敬い、死者を丁重に葬り、その霊を慰める」場所である点は異なる宗教間で共通しているなかで、多磨霊園では「わが国と習俗のいちじるしく異なるイタリー式の建築美術的な風景墓地でなく、自然の肅然たる風光を主とするドイツ・オーストリア式の風景葬地観念に、わが古来の習俗を調和してまとめ」<sup>25</sup>るといふ、井下氏の和洋折衷の想いが込められている。こうして、造園的に区画された緑地内に簡素な墓石が整然と配置されていった。これが名古山霊苑を含め、その後の日本における墓地公園の基準ともなった。井下氏はその後も東京の公園行政の基礎作りを担っていき、日本の都市部の公園造りのテストケースを提供していった。

とはいえ、多磨霊園がすぐに人々に受け入れられたわけではない。造成されたばかりの頃ははまだ墓域全体が荒涼としていたことをはじめ、当初は他に墓地がないために止むを得ず使う気持ちが強かった。墓地公園は、当時の墓地の観念からあまりにもかけ離れていたことがその理由であったという。

しかし以下の 3 つの要因によって徐々に利用が促進されていった。

- ① 関東大震災が発生：開苑した同じ年の 9 月に関東大震災が発生したことで東京市内の寺院墓地が全滅状態となり、その後の区画整理事業での墓地の移転先が多磨霊園となった。
- ② 大公園の趣：植物が生育し景観が成熟するとともに、「市民の誇りとする社会施設としての東京名所の一つ」として認識・称賛された。

③ 著名人の利用：1934（昭和 9）年に東郷平八郎元帥が多磨霊園に埋葬されたことで全国的に霊園の認知度が高まり、また「日々幾千万の参拝者を大型バスにて輸送するに至って、神聖な霊域も紅塵万丈をあぐる如きこととなり、市街地の如き管理を必要とするに至った程」<sup>26</sup>であったという。これが今日の人気の霊園となる端緒ともなった。

その後 1940 年代初頭頃まで公営共葬墓地としての墓地公園が大都市に相次いで造られていったが、第 2 次世界大戦が始まると墓地行政は停滞してしまう。

（6）日本：第 2 次世界大戦後 110 箇所を超える戦災都市の復興事業において、「復興土地区画整理に伴う墓地整理方針」が 1947（昭和 22）年に政府から都道府県知事に通達された。その内容は、「都市部・市街地にある墓地を、郊外に適性に配置された墓地公園に極力移転」する「都市計画墓地」を促進するもので、移転後の跡地は公共用地・緑地、公園、宅地、道路等に用いられていった。またその際に、旧軍用墓地や土地が墓地公園に転用されるケースもあり、名古屋山霊苑はその一つである<sup>27</sup>。

戦前の多磨霊園を端緒とする墓地公園という新しい形式の墓文化は、こうしてその普及が加速していくことになった。一方で移転の結果、墓地が居住地から切り離されて遠隔化し、生活の場であった地縁を失う結果を生み出している。

また現在に至る日本の墓地公園のあり様については、多磨霊園を設計した井下氏が当初抱いていた「墓園全体が一つの庭園・公園である」という理念が十分に反映されていないという指摘もある<sup>28</sup>。墓地と公園は「並置」されるものではなく、同一の土地のなかで一体化されているべきであり、墓石・関連施設・樹木・地形などのすべてが庭園・公園の点景として修景を構成することこそが墓地公園の本来の姿とされる。参拝のついでに公園で遊ぶという発想とは根本的に異なっている。「公園」の厳密な定義にまで立ち入って判断するのは困難だが、造園の理念や目的、そして葬儀や墓への参拝にとどまらないその日常的な使用やあり方に関わる大いなる課題といえる。

#### 2.4 墓地公園としての名古屋山霊苑

名古屋山霊苑は、前述したように戦後の復興事業として当時の石見市長によって構想された墓地公園にほかならず、その戦後のモデルケースとして全国的に注目されることになった（図 5）。多磨霊園と同様に欧米の事例を参考にしたことが推測されるが、明治末期以降とくに都市部で一般化した火葬後の遺灰を納める「家」の墓石が並ぶ景観は、和洋折衷を象徴する新しい墓地の姿ともいえる。

以下では、上記で概観した欧米などの事例とも比較しつつ、名古屋山霊苑の墓地だけではない公園としての特徴について改めて検証を試みる。



図5 名古屋山霊苑 楠谷池

① シンボルとなる建物・施設：中央に 38m の高さに聳える仏舎利塔は、いうまでもなく名古屋山霊苑のシンボルとなっている。日本国内の仏舎利塔ないし仏舎利を祀る奉安所は、古くから伝承されているものから 20 世紀に建立されたものまで含め少なくとも 117 ヶ所が知られている（山頂などに独立して建立されたものを含む）<sup>29</sup>。ただし墓地に建立されたものとしては、名古屋山霊苑の仏舎利塔は日本随一の壮麗さを誇るといえるであろう。塔本体の規模の大きさとともにその外側周囲の基壇上に配された連立式の 6 つの小塔、さらに塔を囲むように建てられたその外郭 4 隅の納骨堂や塔背面の石仏堂が眺望の良い山頂で調和を保っている。

② 宗教・宗派にこだわらない多様性：名古屋山霊苑は市営ということもあり、宗教・宗派の違いにこだわることなく墓石を安置している。19 の寺院墓地から移転された墓石だけでなく、姫路キリスト教やカトリックなどの墓域も小さいながら設けられている。一方で、ペール・ラシェーズ墓地に見られように、異なる宗教の墓石が隣接・混在することはない。また戊辰戦争から第 2 次世界大戦に至る複数の戦没者の碑も祀られている。ただ欧米の一部の墓に見られるような豪華な彫刻を施した墓石を作る習慣は日本にはないので、墓石そのものを眺めながら散策することはないかもしれない。

③ 著名人の墓：名古屋山霊苑には姫路市名誉市民などを祀る「名誉えい地」が設けられており、ここに姫路市公選初代市長石見元秀氏、第 2 代市長吉田豊信氏、そして人間国宝でもある桂米朝氏の計 3 名の墓が安置されている。名誉えい地だけではなく、さまざまな功績を残された方々が墓苑全体には祀られていると考えられる。当然ながらご遺族の了解を得ることが前提ではあるが、そうした墓にも視点をあて姫路や日本の歴史に触れる場とする可能性があるのではなかろうか。

④ 起伏のある地形の利用：名古屋山の自然のなだらかな斜面を生かして整地しているため、仏舎利塔が位置する山頂部を中心に苑内全体に広がる階段状の各々の壇に墓石が整然と並び、明るく開放感があり眺めも良い。目にも優しく、散策に適している。

⑤ 多種多様な樹木や花: 今日では 31 種の樹木と花 1.2 万本余りが随所に植えられ、4 月前後の梅や桜（桜並木）、5 月のツツジ、秋のイチョウやモミジなど花や紅葉の名所となっており四季折々で楽しむことができる<sup>30</sup>。ただ木陰やベンチが少なく、広い敷地で休憩所が管理事務所内のカフェ「蓮」だけなので、暑い盛りの散策にはやや厳しいかもしれない。また広大な敷地内には多くの鳥も集まると思われるが、バードウォッチングがどれほど可能かは未確認である。

⑥ 「公園」: 公園という呼称は使われていないものの、楠谷池や「姫路城十景」のビューポイント<sup>31</sup>周辺はとくに墓石がなく、独立した公園の趣がある。これが前述したように「墓地と公園は「並置」されるものではなく、同一の土地のなかで一体化されていなければならない」と相容れるものなのか議論が必要かもしれない。しかしこうした自由に散策できる場所が、人々にとって貴重な散策の場となっているのは間違いない。実際に筆者らの訪問時には池周辺で犬を遊ばせる光景も見られた。文字通り公園的なこうした活動は、墓石が立ち並ぶ区域では無理といえる。

⑦ 映画・小説・アニメ等コンテンツ: ペール・ラシェーズ墓地では、埋葬されている著名人や見事な彫刻が施された墓石などだけでなく、映画や文学作品、テレビドラマ、さらにはビデオゲームに取り入れられるなど多様な作品のコンテンツとなっていることが世界中から観光者が訪れる理由にもなっている。名古屋山霊苑でもこうしたコンテンツとなるよう働きかける試みが、その知名度を高める方法のひとつになるであろう。ただもちろんこの場合にも、事前にご遺族の方々の了解を得ることが前提となることはいうまでもない。

## 2.5 まとめ

墓地公園の成立は、18 世紀のヨーロッパで起こった産業革命の下で起こった急激な都市化によって、教会墓地が郊外に移転を余儀なくされたことが端緒となっていた。日本においても、明治時代を経た 20 世紀初頭に同じ状況に直面した。さらには第 2 次世界大戦後の都市部の戦災復興事業のなかで、寺院墓地の移転が余儀なくされたことも墓地公園の普及を促すことになった。このように都市部への人口集中と市街地化に伴って誕生した墓地公園は、地域や文化・宗教（ただし墓を作らない宗教を除く）の違いを超えた、この 2 世紀間のグローバルな課題であったといえる<sup>32</sup>。

墓地公園では宗教・信仰にこだわることなく利用できることが一般的であるが、現在では土葬を基本としてきた欧米のキリスト教徒の間でも都市部を中心に火葬が珍しくなくなっており<sup>33</sup>、信仰に基づく葬制（遺体処理）が大きく見直されている現実もある。そして墓地公園が近現代における都市景観を構成する不可欠な要素となっていることは、葬制にとどまらず宗教や文化全般の多様性を認め合っていく上でも大きな



指針となる可能性を孕んでいるともいえる。

一方で「墓地と観光」という組み合わせは、少なくとも今の日本では受け入れ難いと思われ、欧米の事例と安易に比較することはできない。ただ、ご遺族のお気持ちを尊重し、同時に亡くなった方々を静かに祀り祈る場であることが厳守される限りにおいて、その場が広く認知されることがひいては墓地全体の美しい景観の持続を支えていく側面もあると考える。

注

- <sup>1</sup> 播磨時報社（編）『愛郷のひと 石見元秀』、1986年、名誉市民故石見元秀氏顕彰碑建立会、p.87。
- <sup>2</sup> 欧米への視察旅行の記述を、（姫路市役所調査課「石見市長渡米通信」『広報ひめじ』 1955（昭和25）年12月10日、p.2；清和会（編）『戦後二十一年に亘る姫路市政と石見元秀氏の思い出を語る』1970年、（非売品）、pp.91, 131-132）などから断片的に知ることができる。  
また石見元秀氏のご子息で新制姫路市公選4代目姫路市長を務めた石見利勝氏（前姫路市長）によれば、広場・市場を中心に人々が集い町が活性化されるヨーロッパや温泉保養地・観光地として名高いドイツのバーデン・バーデン、町の中心部に車で入ることを避ける習慣が徹底しているアメリカのパーク&ライドなどをいかに姫路市に適用して行くか、元秀氏はいつも考えていたという（2020年9月17日のインタビューより）。お忙しいなか本プロジェクトのインタビューのために貴重な時間を割いて下さった利勝氏に、この場を借りて深くお礼申し上げます。
- <sup>3</sup> 厚生統計要覧「平成27年度 墓地・火葬場・納骨堂数、都道府県—指定都市—中核市（再掲）別」<<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10655249>> 2015年（2021年2月22日参照）。
- <sup>4</sup> 亘徳「墓地の種類」『日本の墓』<<http://www.hakaishi.jp/grave/grave02.html>>（2021年2月22日に参照）。ただし今日では、核家族化や家の継承者の不確定化に端を発する墓の多様化が進み、墓地の定義や実態はかならずしも明確ではなくなっている（細井友美「神奈川県内の公園墓地の景観特性に関する研究」2018年、<<http://www.waseda.jp/sem-yoh/temp/17/17hosoi.pdf>>（2021年2月22日参照））。
- <sup>5</sup> 立体墓地は、さらに下記に分類される：壁墓地＝自然石やコンクリート製の長い壁の壁面が従来の石塔の機能を果たし、その地下に納骨室を設けたもの。納骨堂＝納骨スペースの形態によりロッカー式と仏壇式に大別される。屋内立体墓＝数階建ての建物内に墓地区画を設けて、これを分譲するもの。都市部の寺院墓地に多く見られるようになっている（亘徳「墓地の種類」『日本の墓』<<http://www.hakaishi.jp/grave/grave02.html>>（2021年2月22日参照））。
- <sup>6</sup> 槇村久子「多磨墓地をはじめとする公園墓地の成立・展開と今日的課題」『造園雑誌』、1992年、55(5)pp.121-126。
- <sup>7</sup> 個人墓・家族墓のあり方は、文化・宗教・地域・時代によって多種多様である。現在のヨーロッパでも、一部では土葬墓を後に掘り起こして骨を集め家族墓に納め直す習慣もある。このため実際に墓地全体に埋葬・祀られている人数を把握するのは困難といえ、墓石の数を比較する際には、そうした背景を十分に検証した上で行う必要がある。
- <sup>8</sup> ロマン主義の画家ドラクロワや作曲家のショパン、古代エジプトのヒエログリフを解読したジャンポリオン、アメリカ人歌手のマリア・カラスなど。また『レ・ミゼラブル』の主人公ジャン・バルジャンもここに埋葬されているとされる（Etlin, R.A., “Père Lachaise and the Garden Cemetery”, *The Journal of Garden History*, 4 (3), 1984, pp. 211-222; Paris Cemeteries (2020) “Père-Lachaise”.  
<<http://www.pariscemeteries.com/pere-lachaise>>; Plan du Cimetière du Père-Lachaise<

[https://static1.squarespace.com/static/54f31767e4b03e3d11f04e03/t/576982d26a496357a0197112/1466532563481/PL\\_guidemap.pdf](https://static1.squarespace.com/static/54f31767e4b03e3d11f04e03/t/576982d26a496357a0197112/1466532563481/PL_guidemap.pdf)>, 2020 (2021年2月22日参照)。

- <sup>9</sup> Paris Discovery Guide “Père Lachaise Cemetery: Celebrity Graves & Haunting Tombs in Paris” <<https://www.parisdiscoveryguide.com/pere-lachaise-cemetery.html>> (2021年2月22日参照)。
- <sup>10</sup> Nunez, P. “La Gestion publique des espaces confessionnels des cimetières de la Ville de Paris : l'exemple du culte musulman (1857-1957)”, *Le Mouvement Social*, 2011, No. 237, pp. 13–32. <<https://www.cairn.info/revue-le-mouvement-social-2011-4-page-13.htm>> (2021年2月22日参照)。
- <sup>11</sup> ただし当時の火葬の件数は限定的で、一般化するのには20世紀末のことである。今日ではヨーロッパ北部で火葬(骨壺を墓や納骨堂に納める)にされる割合が高く、パリ市では葬儀の45%、グレーター・ロンドンで90%、コペンハーゲンで95%とされている(Le succès de la crémation en France, *Le Point*, <[https://www.lepoint.fr/societe/le-succes-de-la-cremation-en-france-31-10-2012-1523637\\_23.php#](https://www.lepoint.fr/societe/le-succes-de-la-cremation-en-france-31-10-2012-1523637_23.php#)> (2012年11月1日) (2021年2月22日参照)。  
またカトリック教会は1963年の第2バチカン公会議で火葬を認める声明を出し、(その後も土葬が望ましいとするものの)今日に至るまで火葬率は増加傾向にある。また火葬率はカトリック教会にくらべプロテスタント教会の方が高い(大谷弘道「ドイツ人の弔い感覚」『慶應義塾大学日吉紀要(ドイツ語学・文学)』、2011年、4号、p号、pp.21-37; 火葬研「火葬率」<<http://kasouken.c.ooco.jp/tori-kasouritu.pdf>> (2021年2月22日参照))。
- <sup>12</sup> Etlin, R.A., “Père Lachaise and the Garden Cemetery”, *The Journal of Garden History*, 4 (3), 1984, p. 211)。
- <sup>13</sup> 小宮彩加「ヴィクトリア朝ロンドンの墓地事情-ケンザル・グリーン・セメタリーを中心に」『明治大学教養論集』、2017年、524号、pp.155–170。また同論考によれば、郊外型の公園墓地が高い塀や壁で囲まれているためにその「安全性」が大きな利点でもあったという。その理由には、下記が挙げられている。
1. 死体盗掘を防ぐ：当時は医学や解剖学では処刑された犯罪者の遺体のみを解剖に使うことが許可されていたが、その学生の急増から供給が追い付かず、遺体が高値で取引されるようになった結果、墓地の盗掘や殺人さえ行われた。
  2. 人口の急増とコレラの流行による墓地不足：1800年に100万人を超えたロンドンの人口は1831年には187万人、1851年には265万人と急増したことで住環境の悪化を招き、とくに労働者や職人らの平均寿命が短かった。  
さらに1832年にはコレラの流行によって死亡した7000人を都市部の狭い墓地に折り重なるように埋葬した。そのため墓地から生じる臭気やガス、毒素が水源を汚染し、それがさらに感染者を増やす原因になった。  
このように19世紀のイギリスは多産多死の時代でもあったが、イギリス史上とくに死者の多かった100年として位置づけられている(久保洋一「19世紀イギリスの墓地：共同墓地を中心とした研究動向の整理」『歴史文化社会論講座紀要』2013年、10号、pp.91-105)。
- <sup>14</sup> 久保洋一「19世紀イギリスの墓地：共同墓地を中心とした研究動向の整理」『歴史文化社会論講座紀要』2013年、10号、pp.94-95。
- <sup>15</sup> 大谷弘道「ドイツ人の弔い感覚」『慶應義塾大学日吉紀要(ドイツ語学・文学)』2011年、48号、pp.21-37。
- <sup>16</sup> 黒沢眞理子「19世紀アメリカにおける「田園墓地」運動」『アメリカ研究』1998年、1998巻32号、pp.145-161。
- <sup>17</sup> Ibid., p.146。
- <sup>18</sup> Ibid., p.153-155。



- <sup>19</sup> Ibid., p.147.
- <sup>20</sup> Ibid., p.150.
- <sup>21</sup> Ibid., p.152-153.
- <sup>22</sup> Ibid., p.156. 一方で、田園墓地の自然の美しさに懸念を示し、それは聖書や教会のにとって代わることができないと警告を発する考えもあった。「ピクチャレスクな景観は墓地の厳肅さを失わせるので不適切」であり、「景色の変化が多くある処には、厳肅性も壮大さもない」。また「死や墓に対する不快な連想」や「多くの恐怖」は、「永遠の命という希望をともなう宗教によってのみ完全に排除することができる」という (Ibid. p.157)。
- <sup>23</sup> 石川 美明「わが国における新しい葬法とその法的問題点」『宗教法』2008年、27号、pp.105-128。
- <sup>24</sup> 榎村久子「多磨墓地をはじめとする公園墓地の成立・展開と今日的課題」『造園雑誌』、1992年、55(5)、pp.121-126；大和田勝文『日本における公園墓地の実現をめぐる井下清の模索—多磨霊園の設計経緯を中心として』(東京工業大学工学部社会工学科 修士論文)、2013年；大和田勝文、齋藤潮、笠原知子「多磨墓地の設計経緯に関する研究」『景観・デザイン研究講演集』、2013年、9号、pp.100-106。
- <sup>25</sup> 井下清『建墓の研究』、1942年、雄山閣、pp.57-64。
- <sup>26</sup> 榎村久子, op.cit., p.123. 移転については寺院の強い反対もあった。しかし寺院消失による仏事の停滞が長引き檀家の不満が高まったこと、納骨堂に限っては市内に持てる方針が打ち出されたこと、また寺院の多くが公有地に立地したため土地の権利の主張が不透明であったことなどから次第に受け入れられていった(米井輝圭「日本宗教史と災害」(第五部会、<特集>第72回学術大会紀要)『宗教研究』、201年、487巻別冊、pp.273-274)。
- <sup>27</sup> 名古屋山霊苑協会『50年のあゆみ 名古屋山霊苑協会 創立五十周年記念誌』、2014年、pp.20-24、pp.32-35。
- <sup>28</sup> 榎村久子, op.cit., p.124-126。
- <sup>29</sup> 光地英学『日本の仏舎利塔』1986年、吉川弘文館。
- <sup>30</sup> 姫路市 (2020年7月3日更新) <<https://www.city.himeji.lg.jp/bousai/0000004665.html>> ; 名古屋山霊苑管理事務所『名古屋山霊園樹木調書・員数表』、1999(平成11)年12月31日。
- <sup>31</sup> 名古屋山霊苑協会『50年のあゆみ 名古屋山霊苑協会 創立五十周年記念誌』、2014年、名古屋山霊苑協会。また展望台は、平成6年(1994年)に姫路市民への公募によって「姫路城十景」のビューポイントのひとつに選ばれている(姫路城「世界遺産姫路城十景 案内」、2014年、<<https://castle-himeji.com/himejijo-10views/>> (2021年2月22日参照)。
- <sup>32</sup> 2020年から2021年の今なお全世界を席卷している新型コロナウイルスの影響によって、仕事場や居住地を郊外や農村部に移す傾向が生じており、コロナ後の社会と墓地のあり方の変化が今後注目される。
- <sup>33</sup> これに対し、ユダヤ教徒とイスラーム教徒は、その信仰に基づく土葬を強く守っている。

図出典 (ウェブサイトはすべて2021年2月22日参照)

- 図1 ペール・ラシェーズ墓地 “ParisDiscoveryGuide”,  
<<https://www.parisdiscoveryguide.com/pere-lachaise-cemetery.html>>
- 図2 ケンザル・グリーン墓地 Wikipedia “Kensal Green Cemetery”,  
<[https://en.wikipedia.org/wiki/Kensal\\_Green\\_Cemetery](https://en.wikipedia.org/wiki/Kensal_Green_Cemetery)>
- 図3 ローレル・ヒル墓地の「億万長者通り」 “Laure Hill Cemetery”,  
<<https://thelaurehillcemetery.org/notable-burials>>

図4 多磨霊園 ウィキペディア「多磨霊園」、

<<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%9A%E7%A3%A8%E9%9C%8A%E5%9C%92>>

図5 名古屋霊苑 楠谷池（筆者撮影）

引用・参考文献（ウェブサイトはいずれも2021年2月22日に参照）

赤羽山法善寺 「墓地・仏舎利塔」 <<http://www.a-houzenji.jp/cemetery.html>>

石川美明 2008「わが国における新しい葬法とその法的問題点」『宗教法』27号、pp.105-128。

井下清（1942）『建墓の研究』雄山閣。

今村洋一（2009）「戦災復興計画における旧軍用地の転用方針と公園・緑地整備について」『日本都市計画学会 都市計画論文集』、44（3）：817-822。

ウィキペディア 「多磨霊園」

<<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%9A%E7%A3%A8%E9%9C%8A%E5%9C%92>>

大谷弘道（2011）「ドイツ人の弔い感覚」『慶應義塾大学日吉紀要（ドイツ語学・文学）』48号、pp.21-37。

大和田勝文（2013）『日本における公園墓地の実現をめぐる井下清の模索—多磨霊園の設計経緯を中心として』（東京工業大学工学部社会工学科 修士論文）

大和田勝文、齋藤潮、笠原知子（2013）「多磨墓地の設計経緯に関する研究」『景観・デザイン研究講演集』9号、pp.100-106。

覚王山日泰寺 「奉安塔」 <<https://www.nittaiji.or.jp/12shise/>>

火葬研 「火葬率」 <<http://kasouken.c.ooco.jp/tori-kasouritu.pdf>>

久保洋一（2013）「19世紀イギリスの墓地：共同墓地を中心とした研究動向の整理」『歴史文化社会論講座紀要』10：91-105。

黒沢真理子（1998）「19世紀アメリカにおける「田園墓地」運動—アメリカ「聖地」の創造」『アメリカ研究』1998巻32号：145-161。

光地英学（1986）『日本の仏舎利塔』吉川弘文館。

厚生統計要覧（2015）「平成27年度 墓地・火葬場・納骨堂数，都道府県—指定都市—中核市（再掲）別」 <<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10655249>>

亘徳 「墓地の種類」『日本の墓』 <<http://www.hakaishi.jp/grave/grave02.html>>

小宮彩加（2017）「ヴィクトリア朝ロンドンの墓地事情-ケンザル・グリーン・セメタリーを中心に」『明治大学教養論集』524：155-170。

清和会（編）（1970）『戦後二十一年に亘る姫路市政と石見元秀氏の思い出を語る』清和会（非売品）。

名古屋霊苑 「霊苑について」「霊苑の見どころ」 <[http://nagoyamareien.com/#index\\_content1](http://nagoyamareien.com/#index_content1)>

名古屋霊苑協会（1997）『平成9年度 姫路市霊苑の概要』名古屋霊苑協会。

名古屋霊苑協会（2014）『50年のあゆみ 名古屋霊苑協会 創立五十周年記念誌』名古屋霊苑協会。

名古屋山霊苑管理事務所 (1999(平成 11)年 12 月 31 日)『名古屋山霊園樹木調書・員数表』  
都立公園公式サイ TOKYO 霊園さんぽ

< <http://www.tokyo-park.or.jp/reien/park/outline077.html> >

原田民部 (編) (1970)『姫路市の戦後建設について石見元秀氏の二十一年に亘る市政に参画して』原田民部 (非売品)。

播磨時報社 (編) (1986)『愛郷のひと 石見元秀』名誉市民故石見元秀氏顕彰碑建立会  
姫路市 (1960)『復興の歩み』姫路市役所。

姫路市 (2020 年 7 月 3 日更新) < <https://www.city.himeji.lg.jp/bousai/0000004665.html> >

姫路市市長公室

< <https://web.archive.org/web/20160610104945/http://www.city.himeji.lg.jp/var/rev0/0076/8798/3-koushitu.pdf> >

姫路市史編集専門委員会 (編) (2016)『姫路市史』第 6 巻 本編 近現代 3 姫路市。

姫路市史編集専門委員会 (編) (2020)『姫路市史』第 13 巻下 史料編 近現代 3 姫路市。

姫路市役所調査課 (1954 年/昭和 29 年 4 月 10 日)「環境すぐれた憩いの場 名古屋墓苑開苑式  
挙行」『広報ひめじ』 p.1。

姫路市役所調査課 (1955 年/昭和 25 年 12 月 10 日)「石見市長渡米通信」『広報ひめじ』 p.2。

姫路市役所調査課 (1960 年/昭和 35 年 3 月 25 日)「完成せまる仏舎利塔」『広報ひめじ』 p.1。

姫路城 (2014)「世界遺産姫路城十景 案内」< <https://castle-himeji.com/himejijo-10views/> >

ひめじラボ (2021.2.9)「姫路で万博!? 昭和 41 年の大博覧会を調べてみた!モノレール手柄山  
駅⇄姫路駅も」< <https://himeji-lab.com/expo-monorail/> >

福井孝幹 (2010)『ひめじ平和の礎～名古屋・手柄の碑は語る～』福井孝幹 (非売品)

細井友美 (2018)「神奈川県内の公園墓地の景観特性に関する研究」< <http://www.waseda.jp/sem-yoh/temp/17/17hosoi.pdf> > 早稲田大学卒業論文。

鳳翔山靖國寺 < <https://yasukunidera.or.jp/stupa/> >

槇村久子 (1992)「多磨墓地をはじめとする公園墓地の成立・展開と今日的課題」『造園雑誌』55(5):  
121-126。

米井輝圭 (2014)「日本宗教史と災害」(第五部会、<特集>第 72 回学術大会紀要)『宗教研究』87  
巻別冊: 273-274。

Behl, B.K. (2008), Sacred Stupas, *Frontline, India's National Magazine*, Nov 21, 2008

< <https://frontline.thehindu.com/other/article30198342.ece> >

Domenico, F. (1980), Evolution of the Butkara Stupa. *Butkara I, Swat Pakistan, (1956-1962), Part I*, Rome: IsMEO (Istituto italiano per il Medio ed Estremo Oriente) .

Etlin, R.A. (1984), "Père Lachaise and the Garden Cemetery", *The Journal of Garden History*,  
4 (3), pp. 211-222.

- Le Point (2012年11月1日) Le succès de la crémation en France, *Le Point*,  
<[https://www.lepoint.fr/societe/le-succes-de-la-cremation-en-france-31-10-2012-1523637\\_23.php#](https://www.lepoint.fr/societe/le-succes-de-la-cremation-en-france-31-10-2012-1523637_23.php#)>
- Nunez, P. (2011) “La Gestion publique des espaces confessionnels des cimetières de la Ville de Paris : l'exemple du culte musulman (1857-1957)”, *Le Mouvement Social* No. 237, pp. 13-32. <<https://www.cairn.info/revue-le-mouvement-social-2011-4-page-13.htm>>
- Paris Cemeteries (2020) Père-Lachaise. <<http://www.pariscemeteries.com/pere-lachaise>>
- Paris Discovery Guide “Père Lachaise Cemetery: Celebrity Graves & Haunting Tombs in Paris” <<https://www.parisdiscoveryguide.com/pere-lachaise-cemetery.html>>
- Plan du Cimetière du Père-Lachaise (2020) <[https://static1.squarespace.com/static/54f31767e4b03e3d11f04e03/t/576982d26a496357a0197112/1466532563481/PL\\_guidemap.pdf](https://static1.squarespace.com/static/54f31767e4b03e3d11f04e03/t/576982d26a496357a0197112/1466532563481/PL_guidemap.pdf)>

## 第3章 名古屋山霊苑に関するアンケート調査の結果と分析〔高根沢 均〕

### 3.1 はじめに

名古屋山霊苑は、姫路城の西側にある小高い丘陵に造成された墓地公園である。丘の頂点には、仏舎利を収めるインド様式の白い仏舎利塔がそびえたち、その個性的な外観によって別世界の空間を演出している。道路を挟んだ東側には同じくインド様式の遺族会館の白い建物が立ち、さらに東側の斜面を下れば楠谷池が静かに水を湛えている。池を巡ってもう一つ東の丘を登れば、世界の中心を象徴する須弥山を模した煙突が屹立し、遠くに姫路城を望む展望台もある。このように通常の墓地とは全く異なる空間として設計された名古屋山霊苑は、姫路の戦後復興と新たな都市計画を推進した石見元秀市長の強い意志の産物であった<sup>1)</sup>。

名古屋山霊苑の第1期工事が完了し、開苑式が行われたのは1954年（昭和29年）4月8日のことである。その後、インドのネール首相から仏舎利の寄贈を受け、1960年（昭和35年）に大岡實設計による仏舎利塔が完成した。さらに、その後も霊苑の整備は継続し、須弥山や遺族会館、宗教美術館など様々な施設が造られている。さらに、4月には合同慰霊祭としての「名古屋まつり」が開催されるようになり、桜を楽しむイベントとして毎年多くの人々が訪れている。

こうした名古屋山霊苑の造成は、「墓地公園」というコンセプトを反映したものであると同時に、観光資源としての価値を高めるためであった。石見元秀市長は、「墓地は、四方明媚な風光を眺望でき、四季の小鳥の囀り、虫のすだくを聞けるような楽園、しかも墓の前で家族団欒の場とすることができるようなところが望ましい<sup>2)</sup>」という持論を持ち、「家族が休日に弁当をつかうところ<sup>3)</sup>」という言葉で名古屋山霊苑の公園としての機能を表現していたという。つまり、墓地として死者を埋葬し、お墓参りで訪れる人々がいる一方で、人々が憩いの場として訪れる空間を名古屋山霊苑に創り出すことが石見元秀市長の方針であった。また1967年（昭和42年）には「兵庫県観光百選地」に認定され、1986年（昭和61年）には朝日新聞社による「兵庫風景100選」に選定されるなど、観光資源としての価値も認められてきた。

しかし、名古屋山霊苑の開苑から60年以上が経過し、霊苑を取り巻く社会も刻々と変化するなかで、霊苑と人々の関係性もまた変化していったと考えられる。例えば、仏舎利塔が落成した1954年（昭和29年）に約29万人が訪れたが、その後入場者数は減少を続け、近年では約1万人強となっている（図1）。入場者の減少は、仏舎利塔に対する人々の関心の変化を示すだけでなく、名古屋山霊苑に対する意識の変化とも関係があるのではないだろうか。そこで本研究プロジェクトでは、名古屋山霊苑の認知度と利用目的および訪問場所、そして名古屋山霊苑に対する人々のイメージを明らかにするために、姫路市内数か所でアンケート調査を実施した。本章では、その結果から名

古山霊苑に対する人々の関係のあり方を明らかにし、今後の利活用に向けた課題を抽出する。

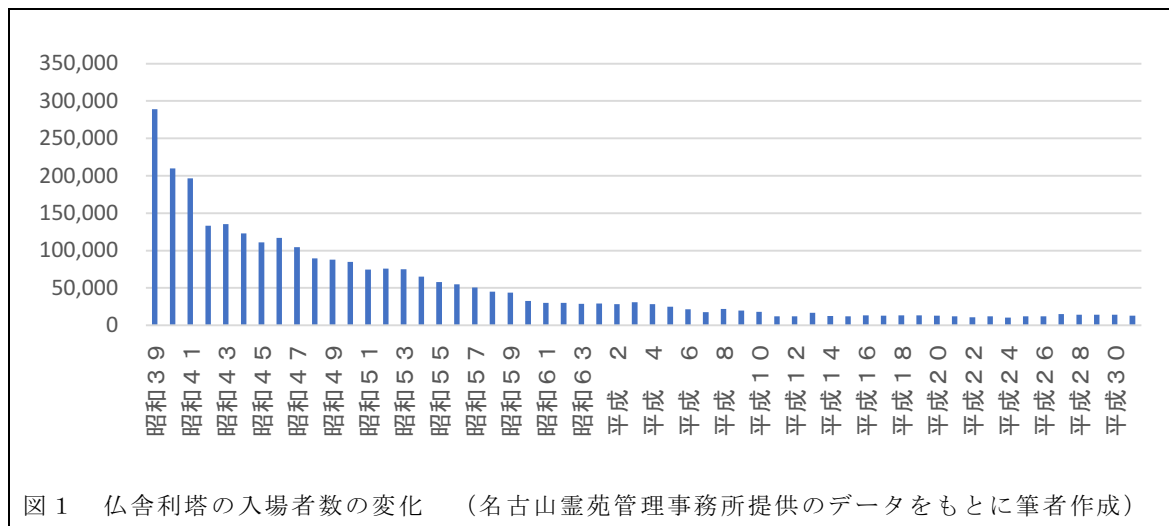


図1 仏舎利塔の入場者数の変化 (名古屋山霊苑管理事務所提供のデータをもとに筆者作成)

### 3.2 アンケート調査の概要

アンケート調査は、姫路市内での路上アンケートとオンラインでのアンケートによって実施した。市内での路上アンケートは、12月28日と29日、および1月4日の3日間で、それぞれJR姫路駅前広場と観光案内所(12月28日)、名古屋山霊苑(12月29日)、および姫路城入口前(1月4日)の3か所で行った。また、オンラインアンケートは、姫路市役所にご協力をいただき、市職員とその家族等を対象として12月24日から1月10日にかけて実施した。これらを通じて、最終的に591件の回答を得ることができた。回答者の性別は男性286件、女性304件、その他1件であった(図2)。また、回答者の年齢分布と居住地は図3および図4のとおりである。

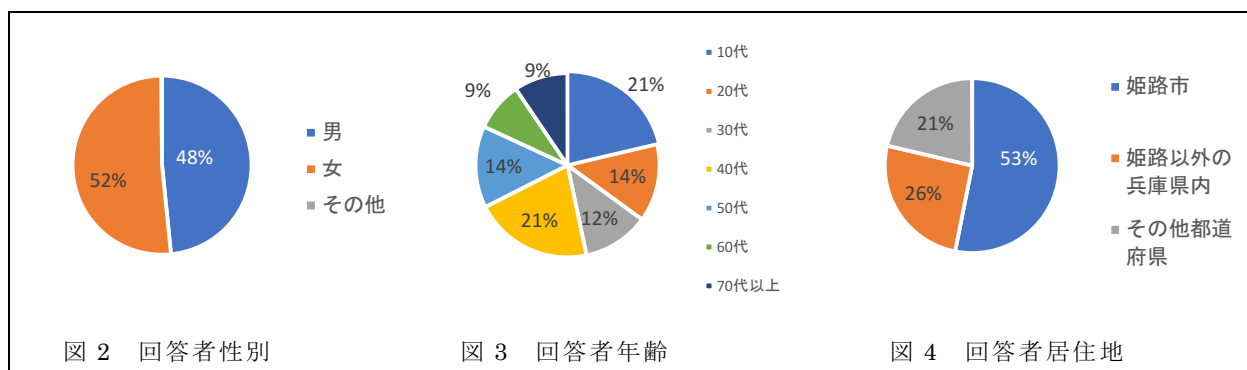


図2 回答者性別

図3 回答者年齢

図4 回答者居住地

### 3.3 アンケート結果

アンケートで得られたデータを居住地と世代別に整理し、名古屋山霊苑および仏舎利塔に関する人々の認識や利用状況、イメージ等について分析する。居住地の区分は、基本的に姫路市内と姫路以外の兵庫県内、およびその他の都道府県とする。ただし、姫路市内の居住者の回答については、名古屋山霊苑で得られた回答(以下、「名古屋回答」とする)とそれ以外の回答を分けてさらに細かい分析を行い、姫路市住民のあいだでの名古屋山霊苑に対する認識や利用の仕方、イメージの違いを検証する。

#### (1) 名古屋山霊苑の認知度

##### ○地域別の傾向 (図 5)

名古屋山霊苑について「知っている」と回答した人の割合は、姫路市内在住者では 91% とほとんどの人が知っているという回答に対して、姫路以外の兵庫県内在住者

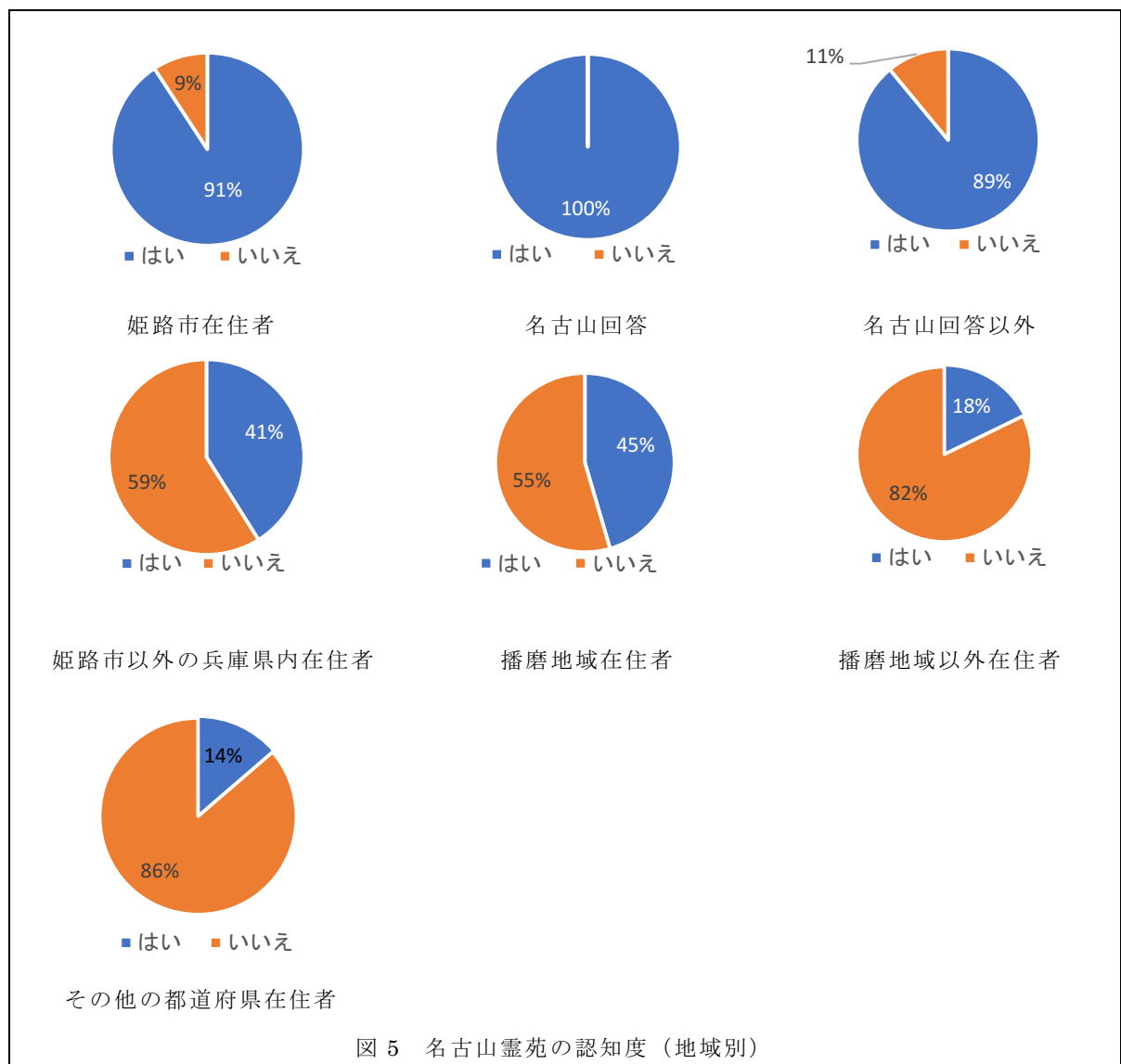


図 5 名古屋山霊苑の認知度 (地域別)

は 41%、その他都道府県では 14%であり、他地域との間で顕著に差が開いた。姫路市内在住者の回答は、名古屋回答を除いても 89%であり、いずれにしても他の地域よりも断然高い割合で名古屋霊苑を知っている人が多いことが分かった。ここで、兵庫県在住者の回答から播磨地域在住者の回答を抽出してみたところ、播磨地域在住者の回答では「知っている」割合は 45%まで上昇した。その一方で、播磨地域を除いた兵庫県内の回答では「知っている」割合が 18%にまで減少し、その他都道府県在住者の回答の割合に近くなった。このことから、名古屋霊苑の知名度は、地理的な距離によって減衰しており、かつ播磨地域を超えると大きく減少すると推定される。

○世代別の傾向（図 6）

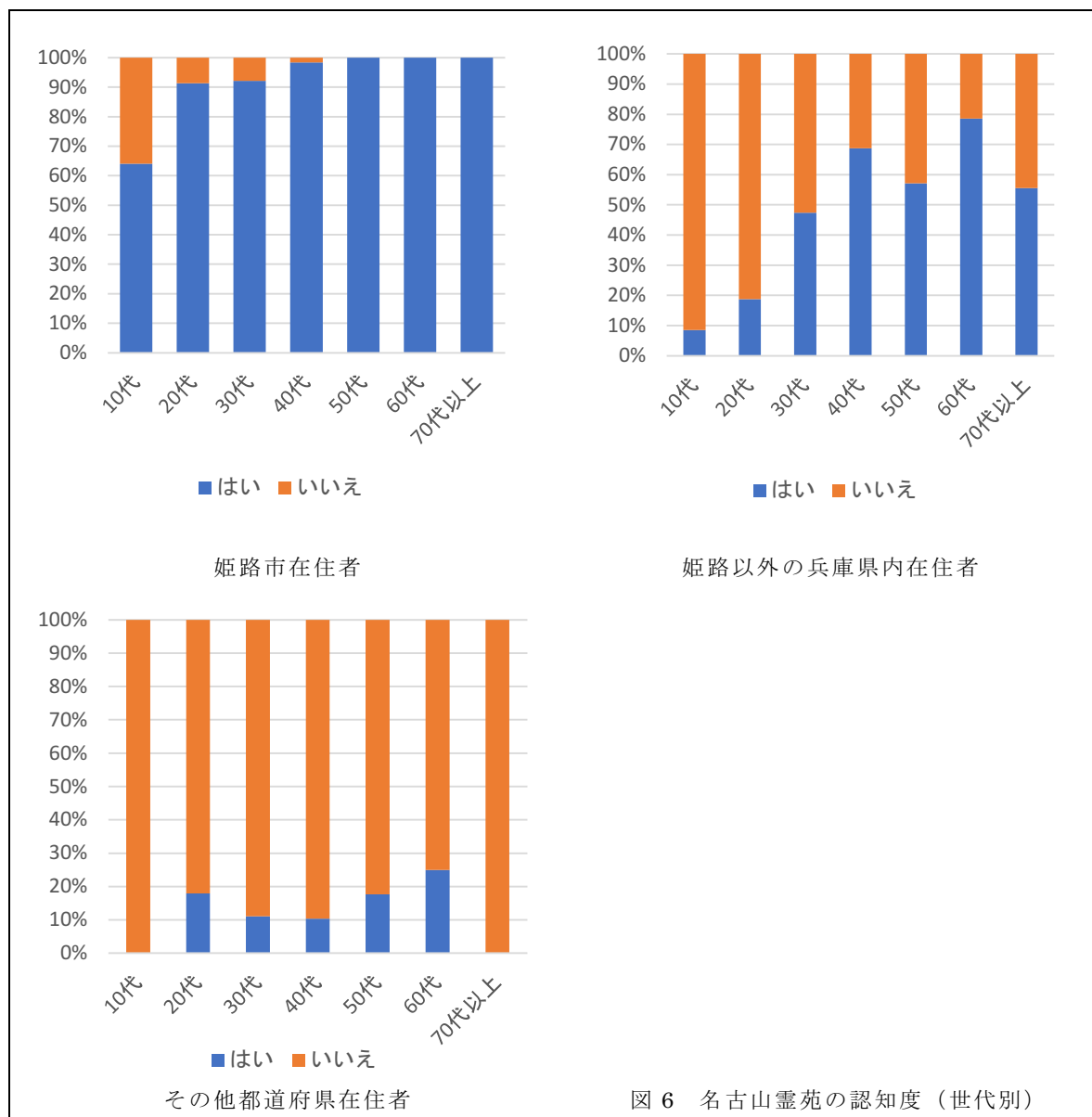


図 6 名古屋霊苑の認知度（世代別）



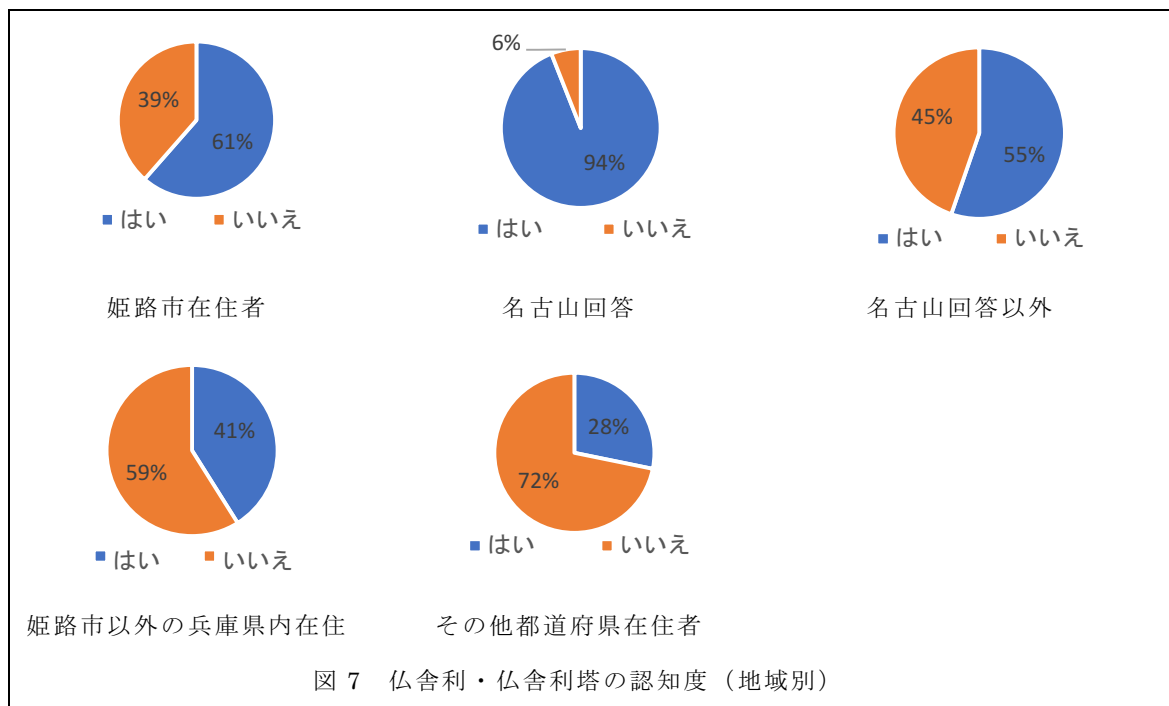
続いて世代別の認知度を見てみると、全体として年齢が上がるごとに認知度が高くなるという傾向が指摘できる。姫路市内在住者では、10代が64%と比較的低位が、それ以外の世代で9割以上が「知っている」と回答している。兵庫県内在住者の回答も年齢の高い方が認知度が高いが、20代で19%、30代で47%であり、姫路市内在住者に比べて弱年齢層の認知度が低い傾向がみられた。その他の都道府県では年齢と認知度の相関は見られなかった。

## (2) 仏舎利・仏舎利塔の認知度

### ○地域別の傾向（図7）

仏教では、お釈迦様の遺骨を「仏舎利」と称し、それを納めた塔（ストゥーパ）のことを「仏舎利塔」と呼ぶ。これらの用語とその意味に関する知識については、名古屋山霊苑の認知度と同様の傾向がみられた。すなわち、仏舎利と仏舎利塔について「知っている」と回答した姫路市在住者の割合は61%であるのに対して、姫路以外の兵庫県内在住者では41%、その他都道府県では28%であり、姫路市から離れるにしたがって認知度が逡減する傾向が確認できる。

さらに姫路市在住者を名古屋山回答とそれ以外に分けると、名古屋山回答では「知っている」割合は94%に上昇するが、名古屋山回答以外では55%に下がる。また一方で、「名古屋山霊苑を知っている」と回答した人に限ると、仏舎利・仏舎利塔という用語の認知度は68%に上昇する。このことから、姫路市内でも名古屋山霊苑とのつながりが深い人や名古屋山霊苑のことを知っている人ほど、仏舎利および仏舎利塔という用語に関する認知度が高いことが分かる。



○世代別の傾向（図 8）

世代別にみても、全体的に若い世代よりも高年齢層になるほど仏舎利と仏舎利塔という用語に関する認知度が高いという傾向がみられた。これらの用語は普段の生活ではほとんど出てこない言葉であるため、歳をとるにつれてお葬式やお墓参り等の経験が増える中でこれらの用語を知ることになると推定される。この傾向は、地域ごとの違いはあまりみられない。

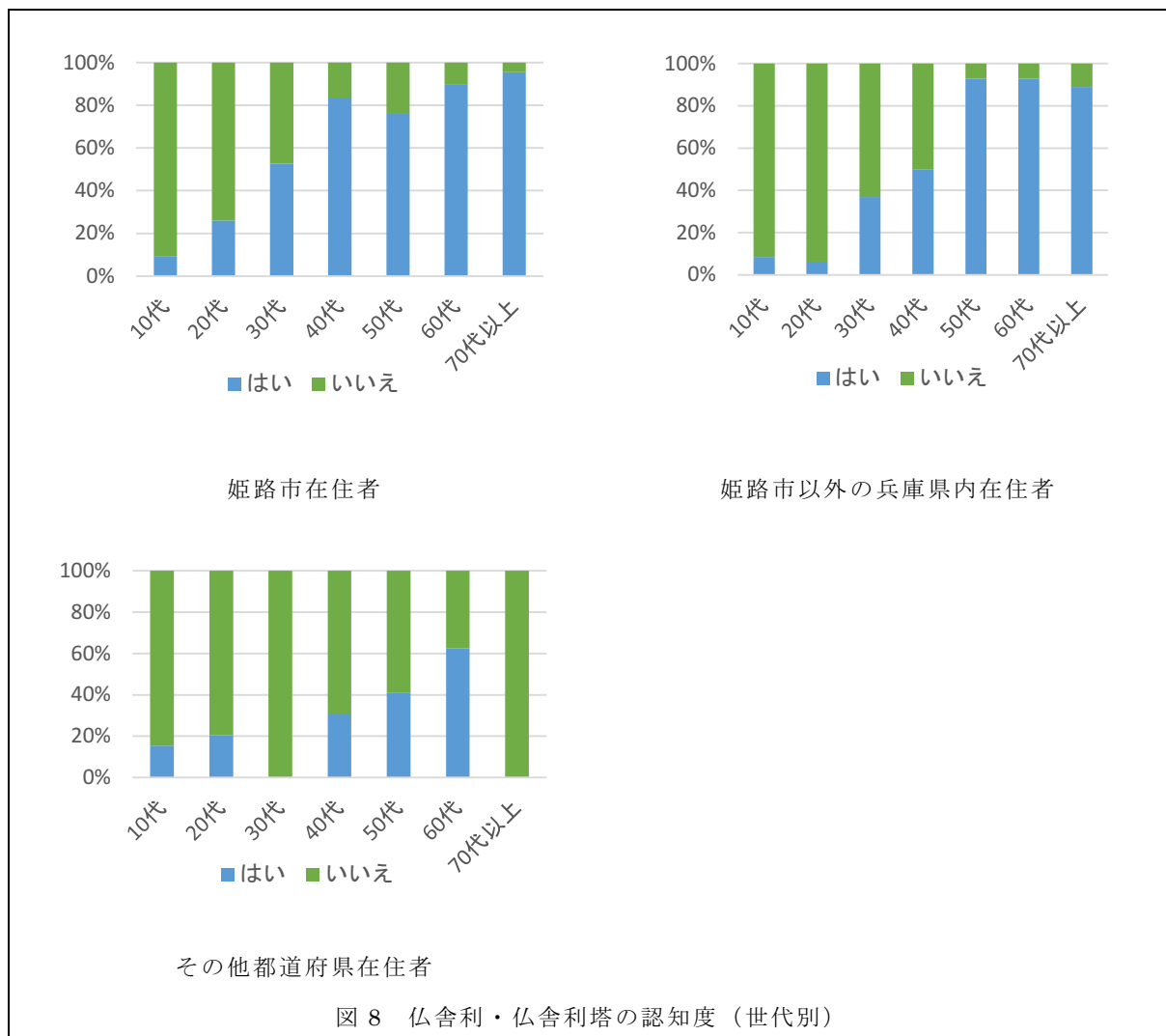


図 8 仏舎利・仏舎利塔の認知度（世代別）

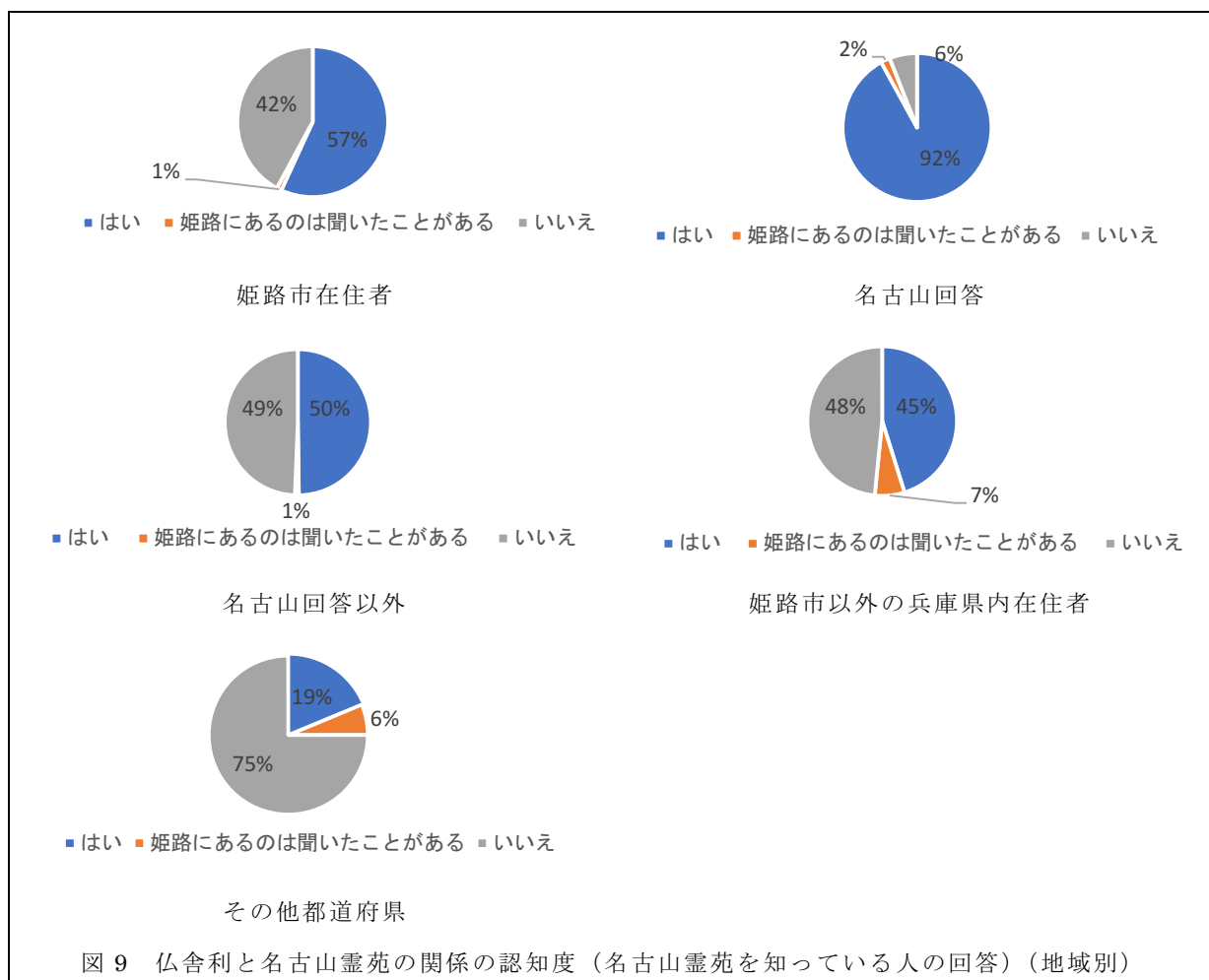
(3) 仏舎利と名古山霊苑の関係の認知度（名古山霊苑を知っている人の回答）

続いて、インドから送られた仏舎利が名古山霊苑の中央の仏舎利塔に祀られていることを知っているかどうかを質問した。この質問は「名古山霊苑を知っている」と回答した人のみが回答している。

○地域別の傾向（図 9）

名古屋山霊苑の認知度に比べて、名古屋山霊苑と仏舎利・仏舎利塔の関係を認識している割合は、全体的に低くなっている。地域別にみると、姫路市在住者の場合、仏舎利・仏舎利塔が「名古屋山霊苑にあることを知っている」という割合は57%、「姫路市にあるのは聞いたことがある」という割合は1%となった。それに対し、兵庫県内在住者の場合、「名古屋山霊苑にあることを知っている」という割合は45%、「姫路市にあるのを聞いたことがある」という割合は7%であり、その他都道府県は「名古屋山霊苑にあることを知っている人」は19%、「姫路市にあるのを知っている」という割合は6%となった。

さらに姫路市在住者の回答を名古屋山回答とそれ以外に分けてみると、名古屋山回答では仏舎利・仏舎利塔が「名古屋山霊苑にあるということを知っている」と回答する割合は92%に達するのに対して、名古屋山回答以外の回答では50%となった。



「名古屋山霊苑を知っている」かつ「仏舎利・仏舎利塔という用語を知っている」という人は68%であった一方で、名古屋山霊苑を知っていたとしても「仏舎利および仏舎利塔」という存在を名古屋山霊苑と結びつけられる人が姫路市内在住者であっても半分

ほどに過ぎない、という実態が浮かび上がってくる。また、兵庫県内およびその他都道府県ではさらにその数字が低いことから、姫路以外の地域には仏舎利塔が知られていないということがわかる。近年の仏舎利塔の入場者数低迷の原因の一つに、認知度の低さがあることがデータで裏付けられた。

○世代別の傾向（図 10）

名古屋山霊苑と仏舎利・仏舎利塔の関係については、基本的に年齢が高くなるほど認知度も高いという傾向がみられた。地域差はほとんどないが、兵庫県を超えると世代を問わずあまり知られていないことがわかる。

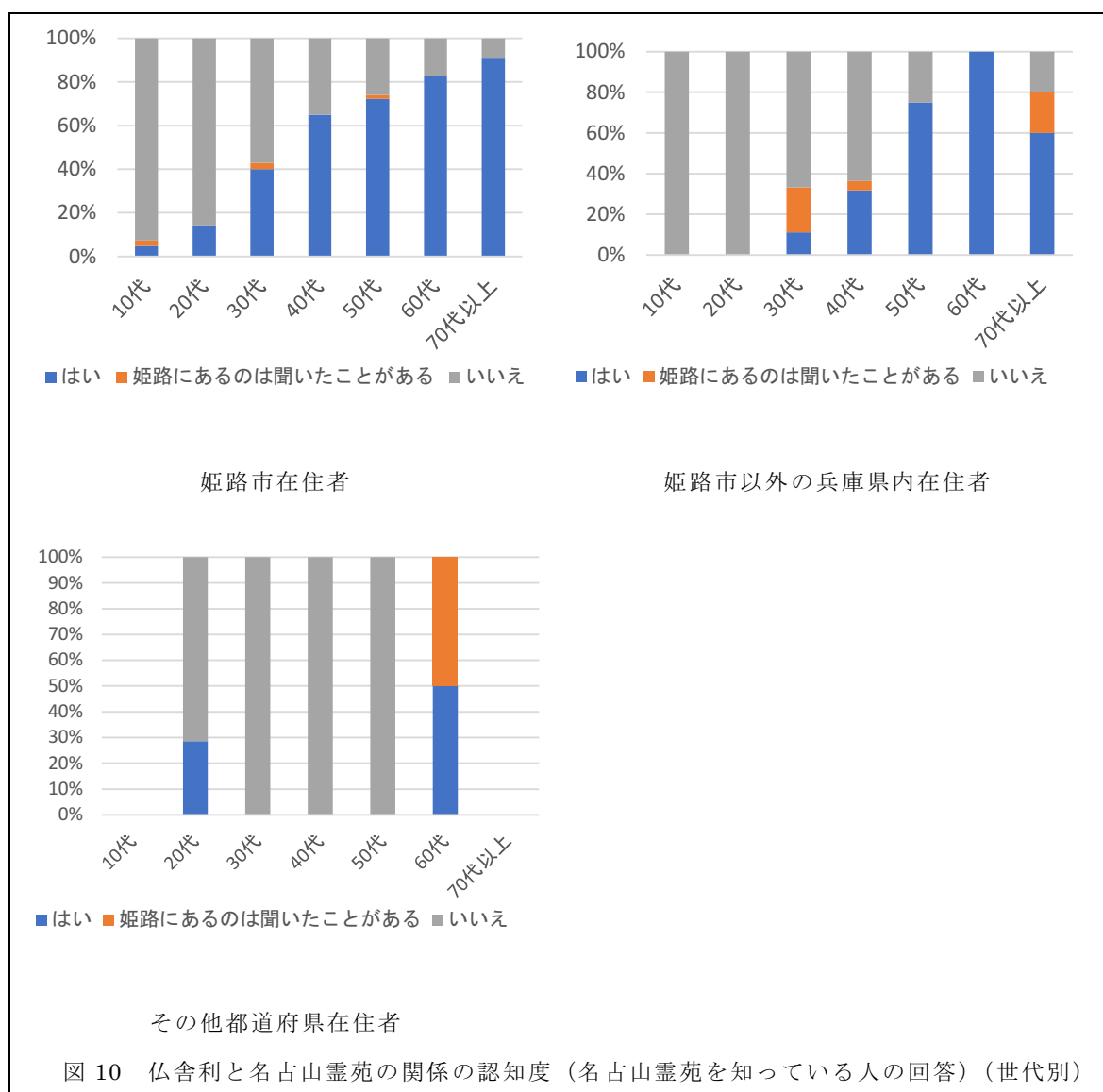


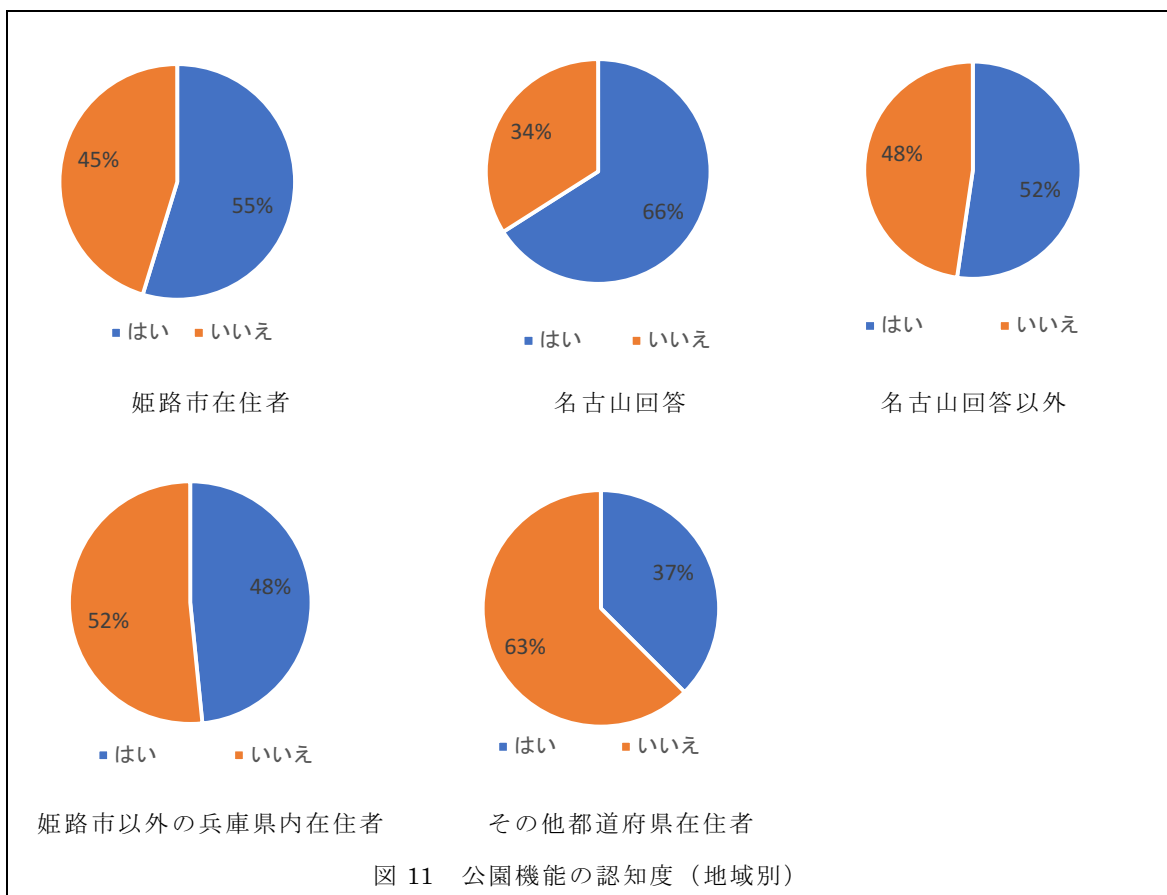
図 10 仏舎利と名古屋山霊苑の関係の認知度（名古屋山霊苑を知っている人の回答）（世代別）

(4) 公園機能の認識

○地域別の傾向（図 11）

名古屋山霊苑が当初から公園としての機能を意図して造成されていることを知っているかという質問については、「知っている」と回答した割合は、姫路市内在住者が 55%、姫路以外の兵庫県内在住者が 48%、その他都道府県では 37%であった。姫路市内および兵庫県内で名古屋山霊苑を知っている人のうち約半数が、それが単なる墓地ではなく、公園として整備され機能していることを認識しているという状況である。

さらに姫路市内在住者の回答を名古屋山回答とそれ以外に分けてみると、名古屋山回答では「知っている」と回答した割合が 66%、名古屋山回答以外では 52%となった。これは、名古屋山霊苑とつながりのある人のうち、約 7 割は公園機能について認識しているという状況を意味する。逆に言えば、約 3 割は名古屋山霊苑の公園としての機能を実感していないということでもある。



### ○世代別の傾向（図 12）

世代間での傾向をみると、やはりこれまでの項目と同様に、全体的に若い世代よりは年上世代のほうが公園としての機能を認識しているという結果になった。注目されるのは、特に姫路市在住者の場合、50代以上になると公園機能の認知度が顕著に高くなるという点である。理由はいくつか考えられる。手がかりの一つは、訪問者数の変化である。仏舎利塔の訪問者数の推移（図 1）をみると、落成した 1954 年から 1980

年代のあいだに急激に減少し、1990年代から現在にかけて減少曲線は緩やかになり安定している。1980年代までに幼少期を過ごした50代以上の方は、お墓参り以外の理由で名古屋霊苑を訪れる機会が多かったのではないかと推測される。また、後述するように、年配の世代になるほど名古屋霊苑の利用目的が多様化する傾向がある。お墓参り以外に日常的に名古屋霊苑を訪問する機会が多いため、公園機能の認知度が高い、ということも考えられるだろう。

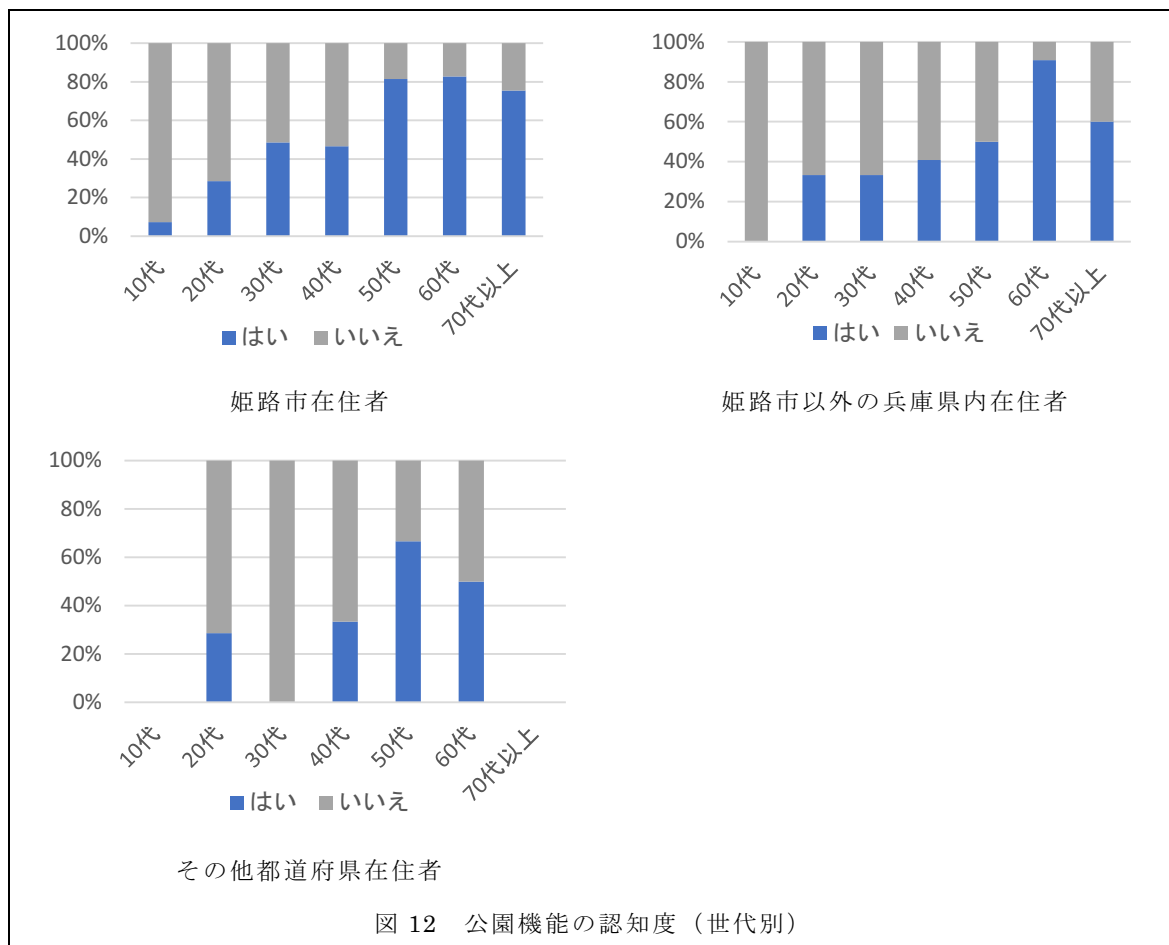


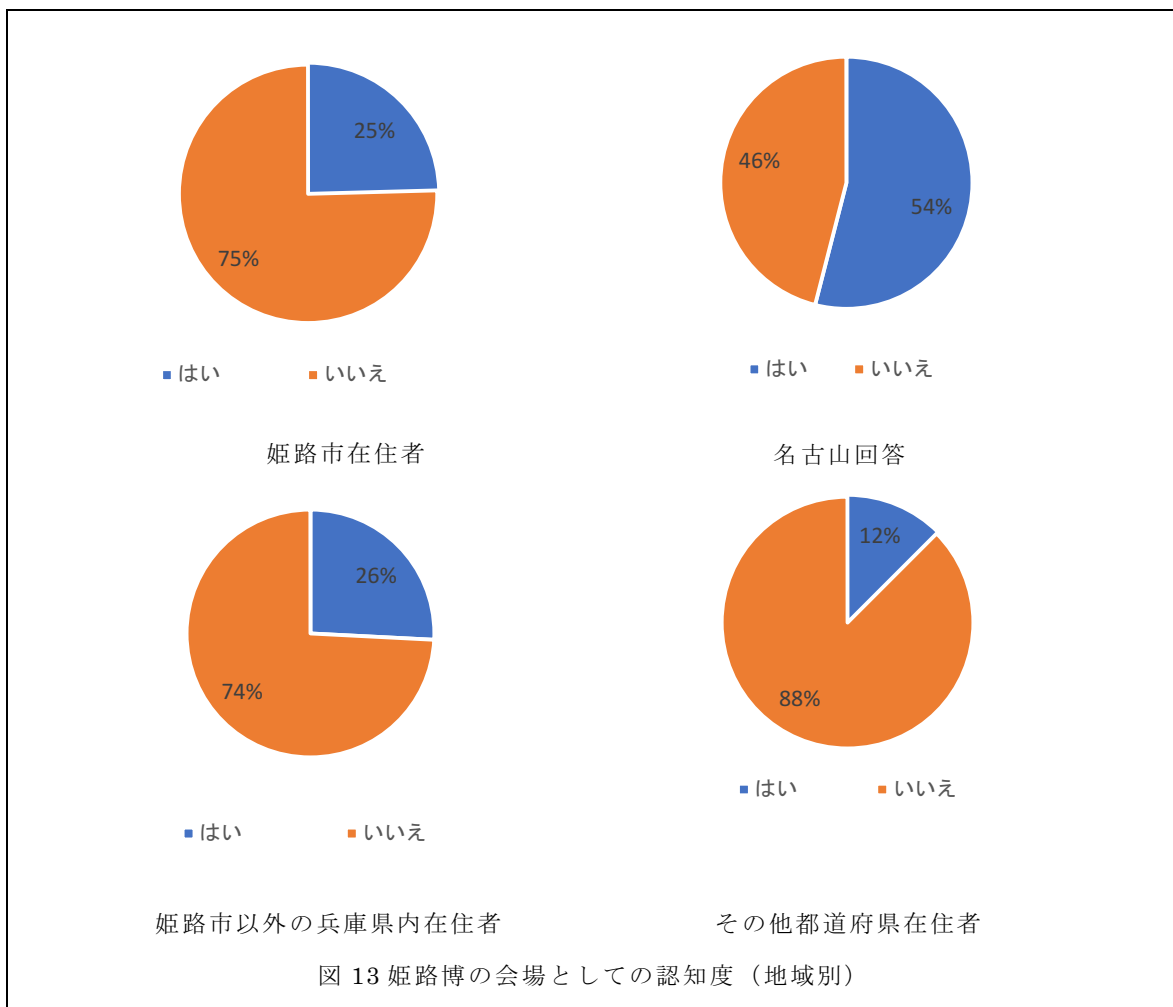
図 12 公園機能の認知度（世代別）

#### (5) 姫路博の会場としての認知度

##### ○地域別の傾向（図 13）

名古屋霊苑が姫路大博覧会の会場の一つであったことは、当時の姫路市にとっての名古屋霊苑の重要性を物語る歴史的な事実である。しかし、この点について「知っている」と回答した人の割合は、姫路市在住者が25%、姫路以外の兵庫県内在住者は26%、その他都道府県に至っては12%であり、地域間での差はそれほど大きくない。姫路市民のあいだでも、姫路博と名古屋霊苑の関係はあまり認識されていないことが明らかになった。

一方で、名古屋回答は 54%が「知っている」と回答していることから、名古屋霊苑の利用者のあいだではそうした歴史的な事実が比較的広く認識されているということが分かる。



○世代別の傾向（図 14）

この点については、姫路市内在住と兵庫県内では同様に年配の方が認知度が高いという結果となった。特に 60 代以上の認知度は他の世代に比べて顕著に高く、やはり博覧会を実際に経験した人とそうでない人とのあいだで明確な差が出たといえる。これは見方を変えれば、姫路大博覧会の記憶の継承がうまくいっていない、ともいえるだろう。その他の都道府県では 88%が「知らない」と回答していることも合わせて考えると、姫路大博覧会の「遺産」の継承と活用という課題がみえてくるのではないだろうか。

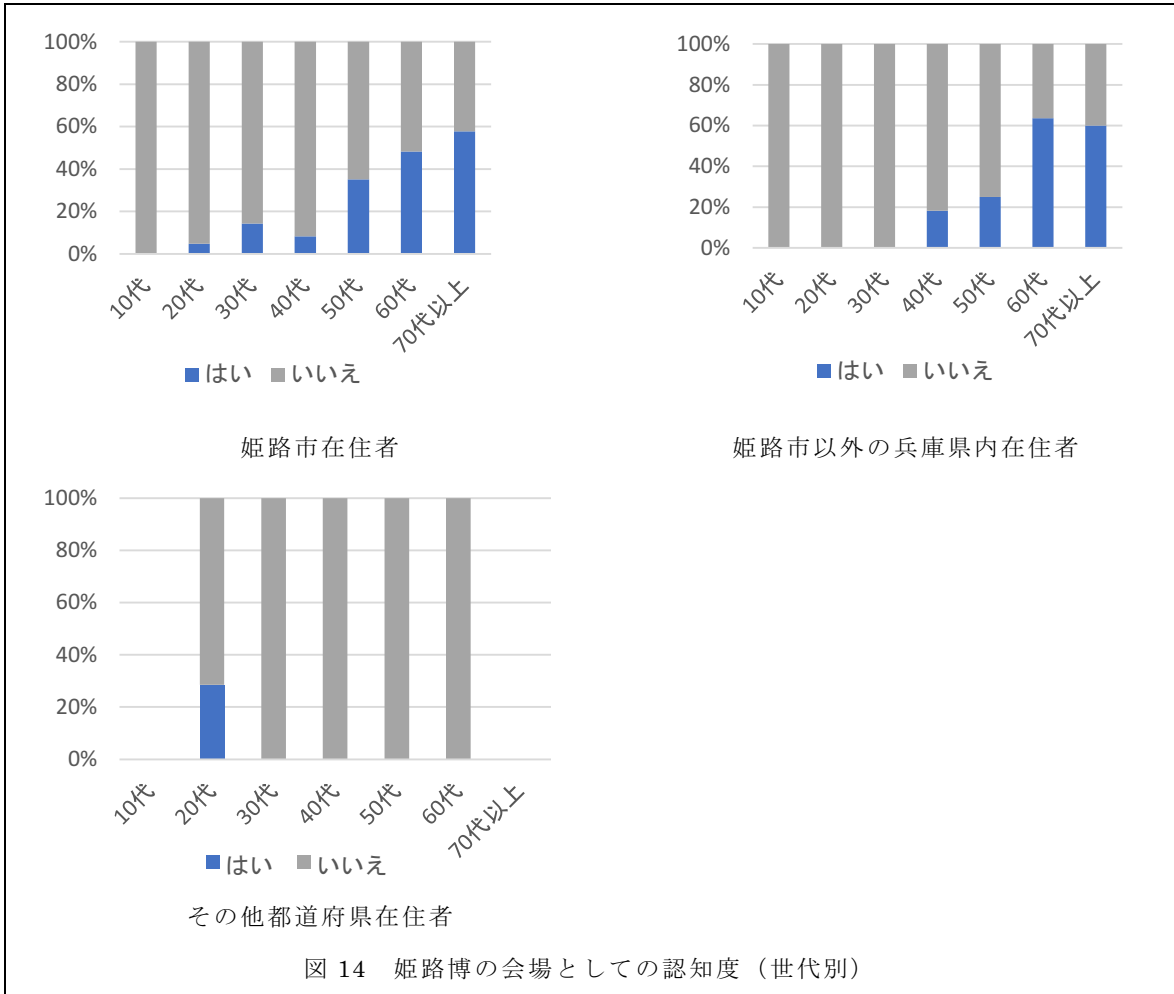


図 14 姫路博の会場としての認知度（世代別）

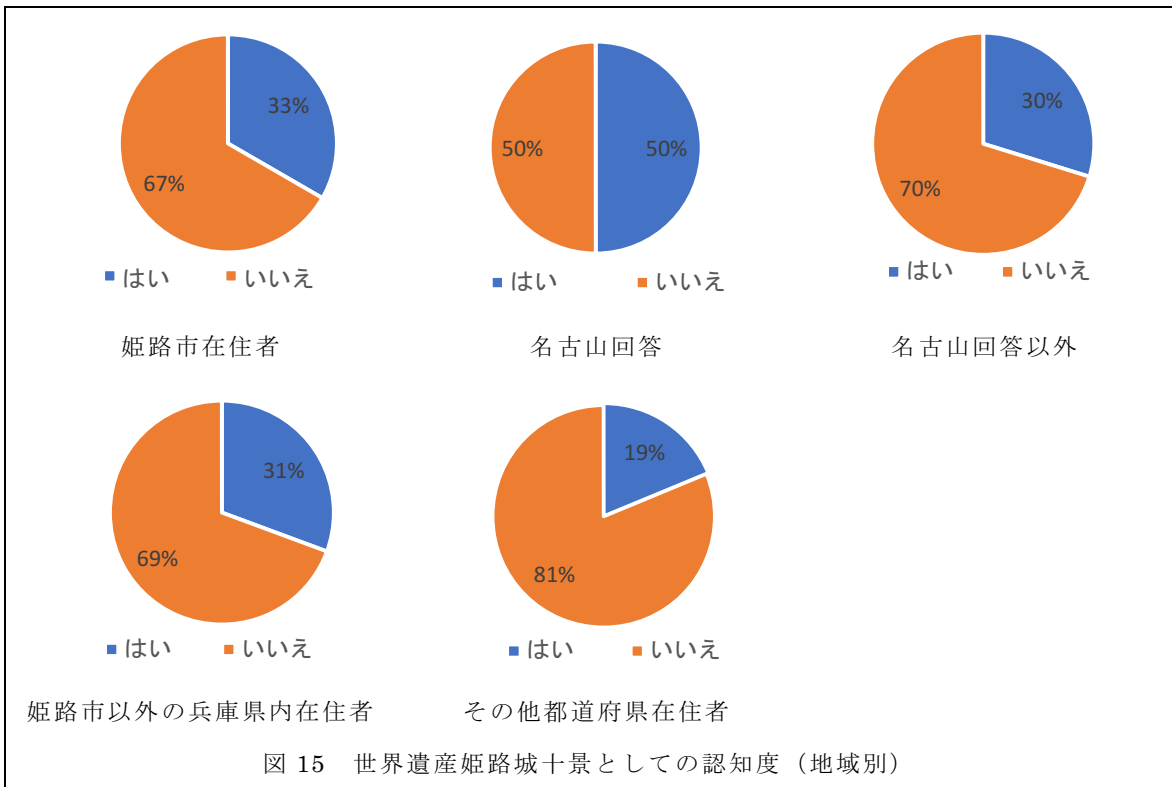
(6) 世界遺産姫路城十景としての認知度

○地域別の傾向（図 15）

世界遺産姫路城十景とは、姫路城の世界遺産登録を記念して、姫路市が 1994 年（平成 6 年）に姫路城が最も美しく見えるポイントを市民から公募し、「誰でも自由に行ける」「お城を取り巻く方向にある」といった基準に基づいて選定した 10 箇所のビューポイントである<sup>4</sup>。名古屋山霊苑もその一つに選出されており、姫路城を眺める展望台がある。その事実について「知っている」と回答した割合は、姫路市在住者が 33%、姫路以外の兵庫県内在住者が 31%、其他都道府県在住者が 19%であった。姫路市民とそれ以外の兵庫県民のあいだで認知度にほとんど差がないということから、姫路城十景という取り組み自体が姫路市民のなかでもあまり知られていないのではないかと推測される。

一方で、名古屋山回答の数字を見ると、「知っている」という回答が 50%となり、名古屋山回答以外では 30%であることと比較すると、明らかに高い割合となった。これは、やはり名古屋山霊苑との関係が深い集団ほど名古屋山霊苑の多面的な価値を認識しているといえるだろう。

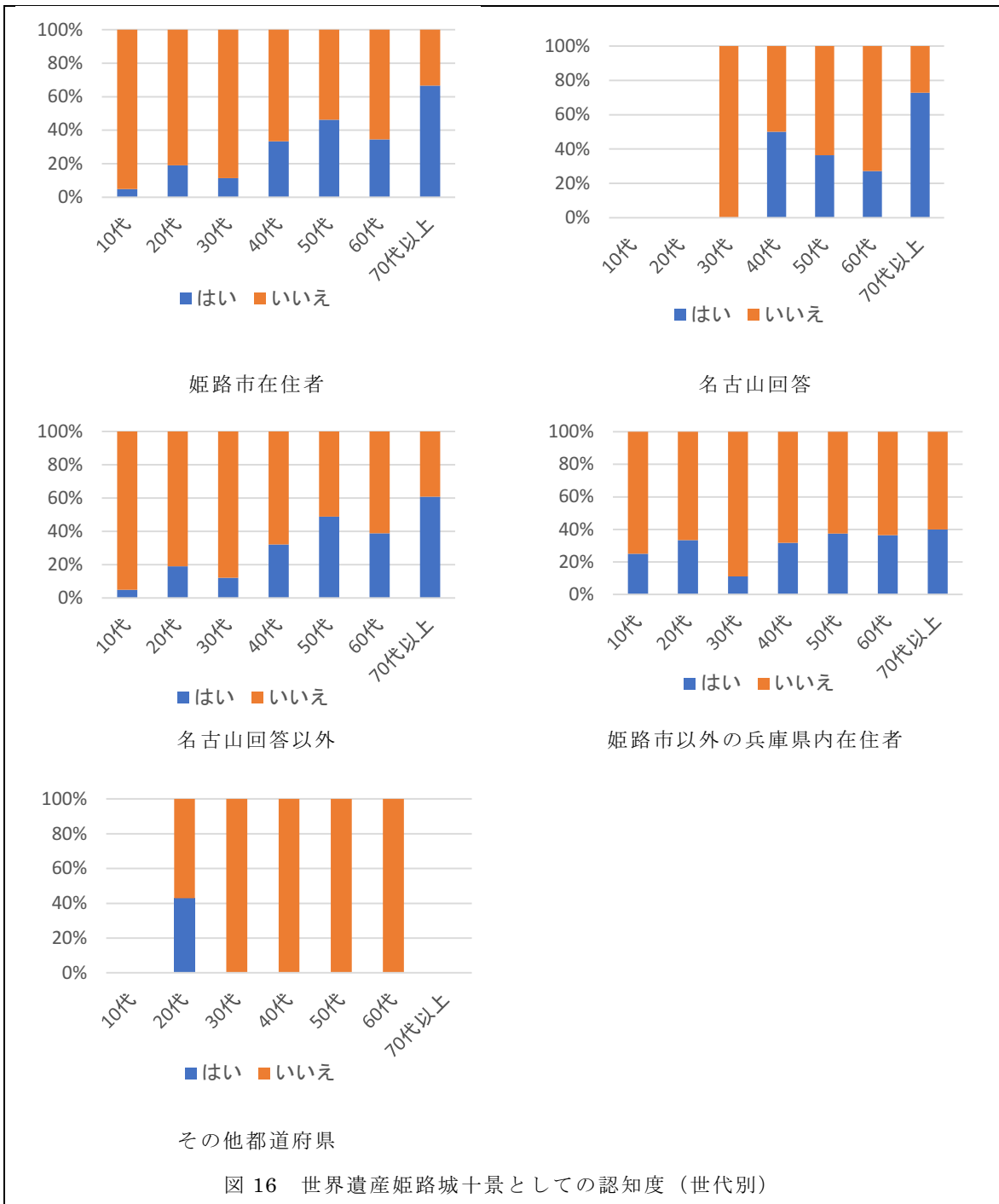




○世代別の傾向（図 16）

世代間の回答結果をみると、姫路市在住者の回答は、他の質問と同様に、全体的に若年層よりは高年齢層の方が認知度が高くなる傾向にあるという結果となった。一方で姫路以外の兵庫県内在住者の回答では、30代が低く出ているほかは全ての世代で低い傾向にあり、全体的に認知されていないということが分かる。その他都道府県在住者は20代を除いて他の世代は全く知らない状態であり、やはり全体的に認知されていないといつてよい。

また、もう少し細かく見ると、高齢世代のなかで60代の認知度が下がっていることが指摘できる。姫路市在住者を名古屋山回答とそれ以外の回答にわけてみても同様の傾向であり、特に名古屋山回答では50代も割合が低くなっている。姫路十景が選定された1994年当時に20代から30代であった世代のあいだで、なぜ姫路十景に関する認識が薄いのかについては、残念ながら今回の調査からは手掛かりは得られなかった。



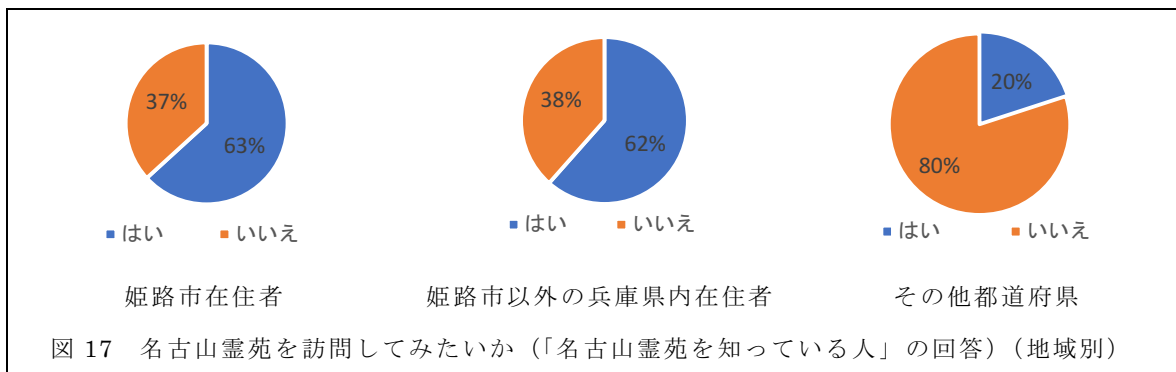
(7) 名古屋山霊苑を訪問してみたいか（「名古屋山霊苑を知っている人」の回答）

○地域別の傾向（図 17）

「名古屋山霊苑を知っている」人で、かつすでに訪問した経験のある人を除いたなかで、名古屋山霊苑を「訪問したい」と回答した人は、姫路市在住者が 63%、姫路以外の兵庫県内在住者が 62%と、ほぼ同じ割合となった。一方で他の都道府県在住者の場合、8割の人が「訪問したいとは思わない」と回答し、まったく逆の結果となった。この違いは、姫路市内だけでなく、兵庫県内でも訪問者を増やす潜在的な可能性があるが、

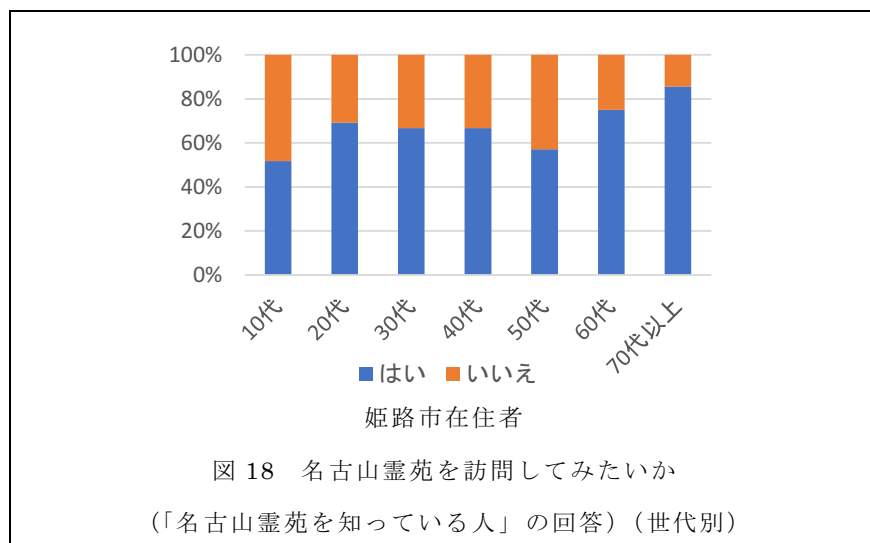
県外からの訪問者を増やすことは困難であるということを示唆しているといえるだろう。すなわち、県境を越えて移動するだけの観光欲求を満たす価値が認識されていない、ということである。

一方、後述するように、アンケートの自由記述欄で、名古屋山霊苑は「墓地」であり、観光対象として訪れる気持ちになれないという意見が複数寄せられている。「訪問したくない」と回答した人は、「墓地」と「公園」という名古屋山霊苑の二つの側面のうち、「墓地」の側面に引き寄せられている可能性も指摘できる。



### ○世代別の傾向（図 18）

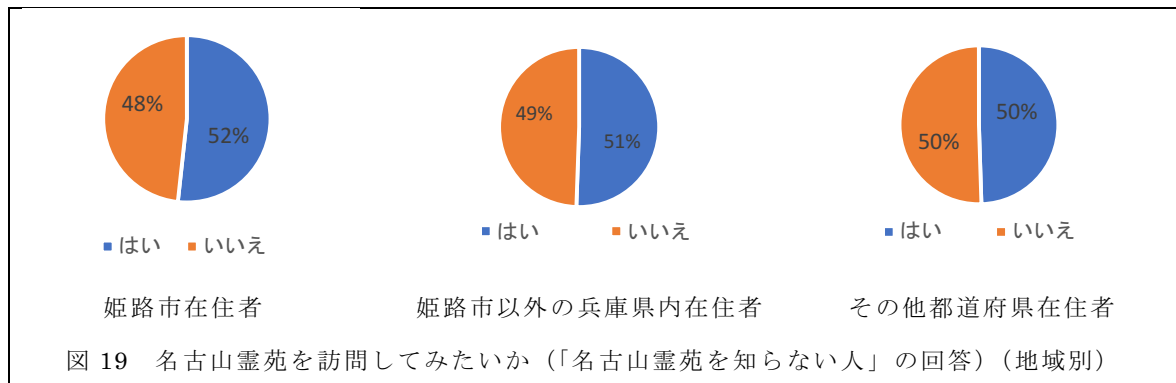
この問いに関しては、姫路市在住者の回答では、世代間の違いは見られなかった。若い世代から年配の世代まで、半分以上が訪問することに興味を持っているという結果となった。一方で、姫路以外の兵庫県内在住者の回答は世代ごとに分けるとサンプル数が少なくなるため、残念ながら参考になる結果は得られなかった。



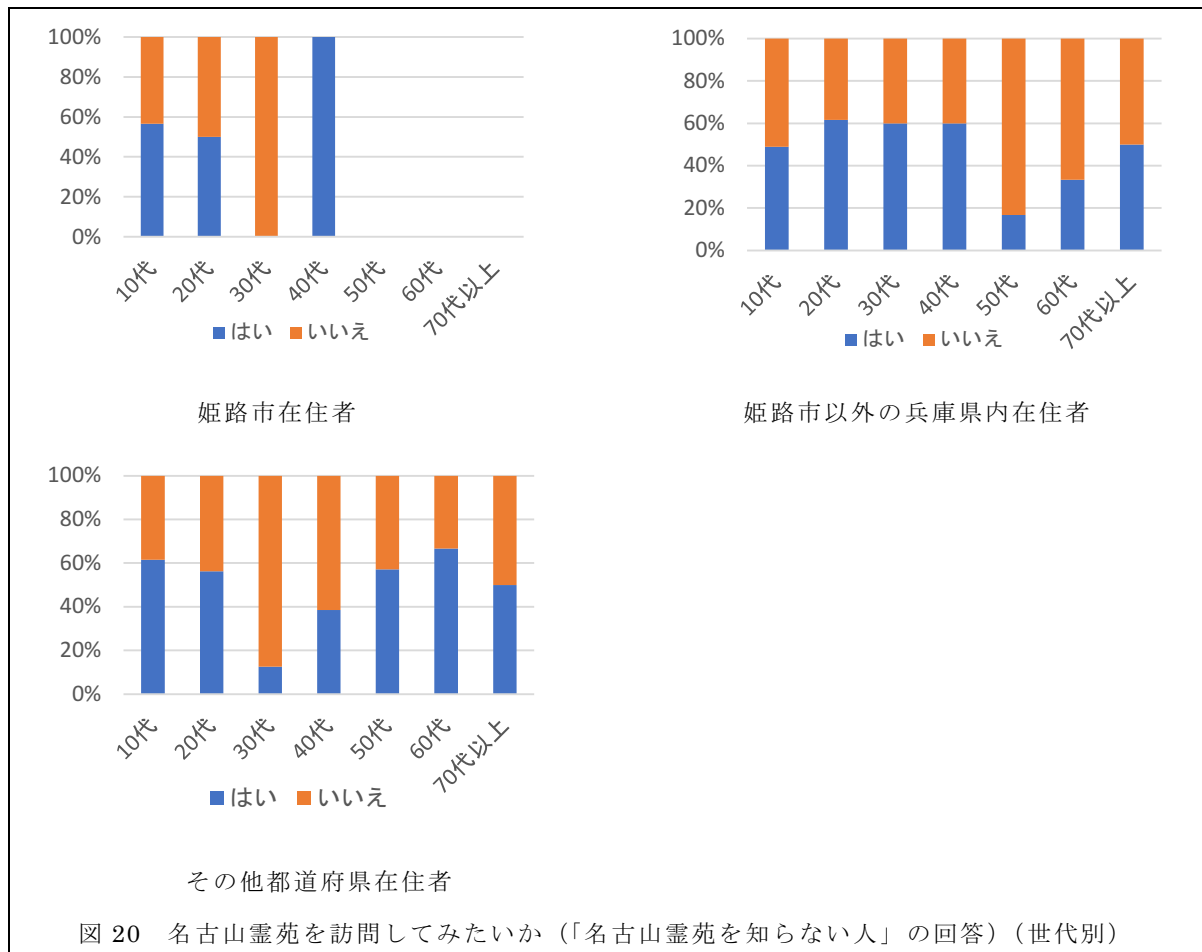
(8) 名古屋山霊苑を訪問してみたいか（名古屋山霊苑を知らない人）

○地域別の傾向（図 19）

さらに、名古屋山霊苑を知らない人に前項と同様の質問をしたところ、「訪問したい」と回答した割合は姫路市在住者が 52%、姫路以外の兵庫県内在住者で 51%、その他の都道府県でも 50%となり、面白いことに地域差はほとんど出なかった。半分以上が訪問することに興味を示し、残り半分以上が興味を示さないという結果となった。



○世代別の傾向（図 20）



姫路市在住者の場合、世代別に分けるとサンプル数が少なくなるが、比較的多い10代と20代ではどちらもほぼ半数が興味を示していた。また姫路以外の兵庫県在住者の場合でも、比較的サンプル数の多い10代と20代では5割と6割が訪問に興味を示している。その他の都道府県在住者の場合は、比較的サンプル数の多い20代と40代のうち、20代は5割強が訪問に興味を示しているが、40代は逆に40%を切る結果となった。少なくとも若い世代でも半分が興味を示しているとは言えるだろう。

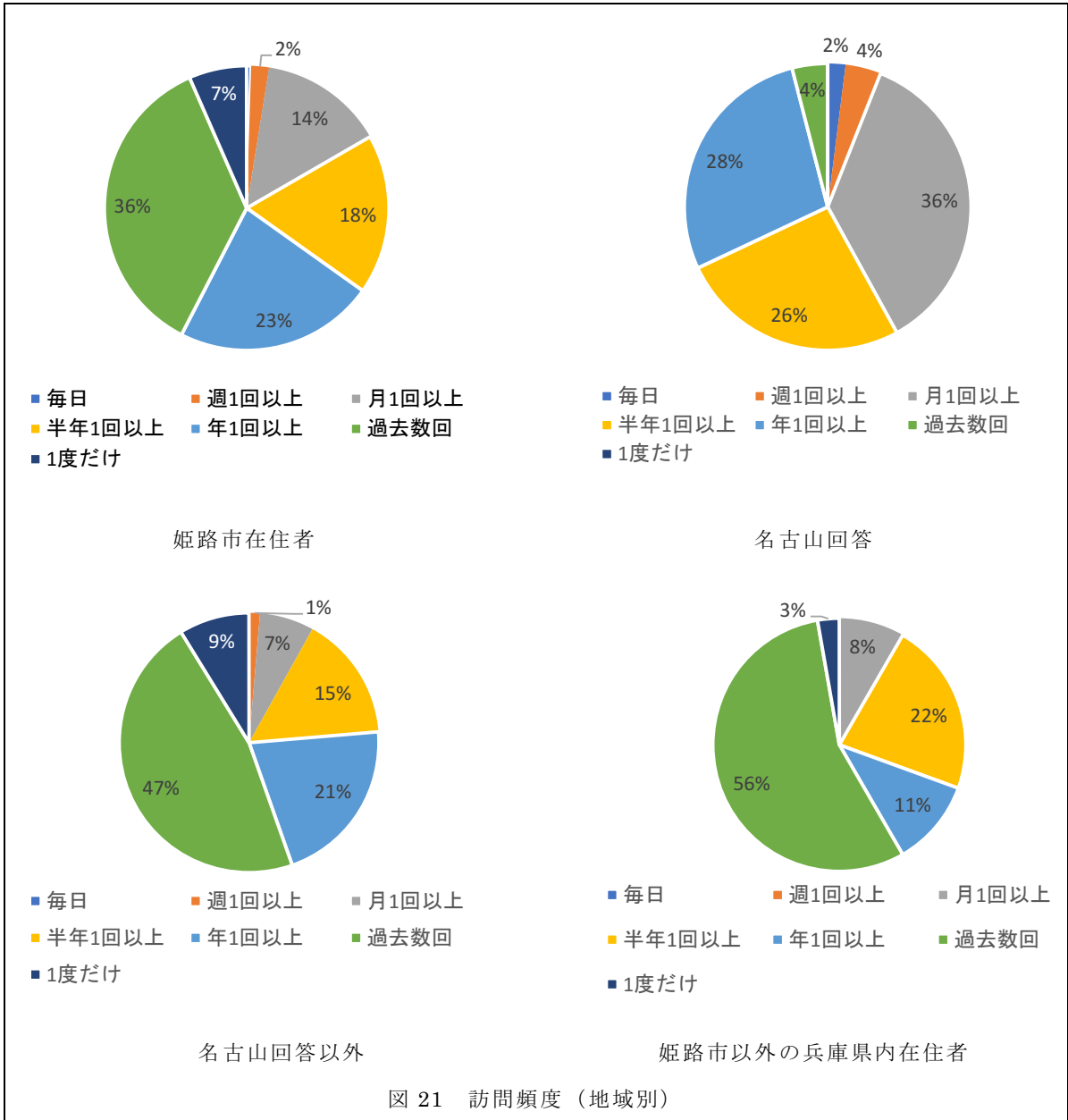
#### (9) 訪問頻度（過去に名古屋山霊苑を訪れたことがある人の回答）

以下の質問では、その他の都道府県で訪れたことのある人のサンプル数が少なくなるため、分析から外し、姫路市在住者と姫路以外の兵庫県内在住者を対象として比較分析を進める。

##### ○地域別の傾向（図 21）

名古屋山霊苑を訪問したことがある人に訪問の頻度を質問した結果、姫路市在住者の場合、「過去数回来たことがある」という割合が最も高く36%を占めるが、一方で月1回14%、半年1回18%、年1回23%という回答は定期的に利用している層が半分以上に達することを示している。ここで名古屋山回答とそれ以外とに分けてみると、異なる傾向が確認できた。名古屋山回答では、週1回から始まって年1回に至るまで、定期的に訪問している層が9割を超えることから、家族・親族のお墓参りまたは散歩・散策などの日常での利用が想定される。名古屋山回答以外でみると、過去数回の訪問が47%と増加し、定期的な訪問者は43%まで減少する。この結果から、姫路市在住者の名古屋山霊苑の利用は、約半分がお葬式やイベントなど特別な機会であることが推測される。

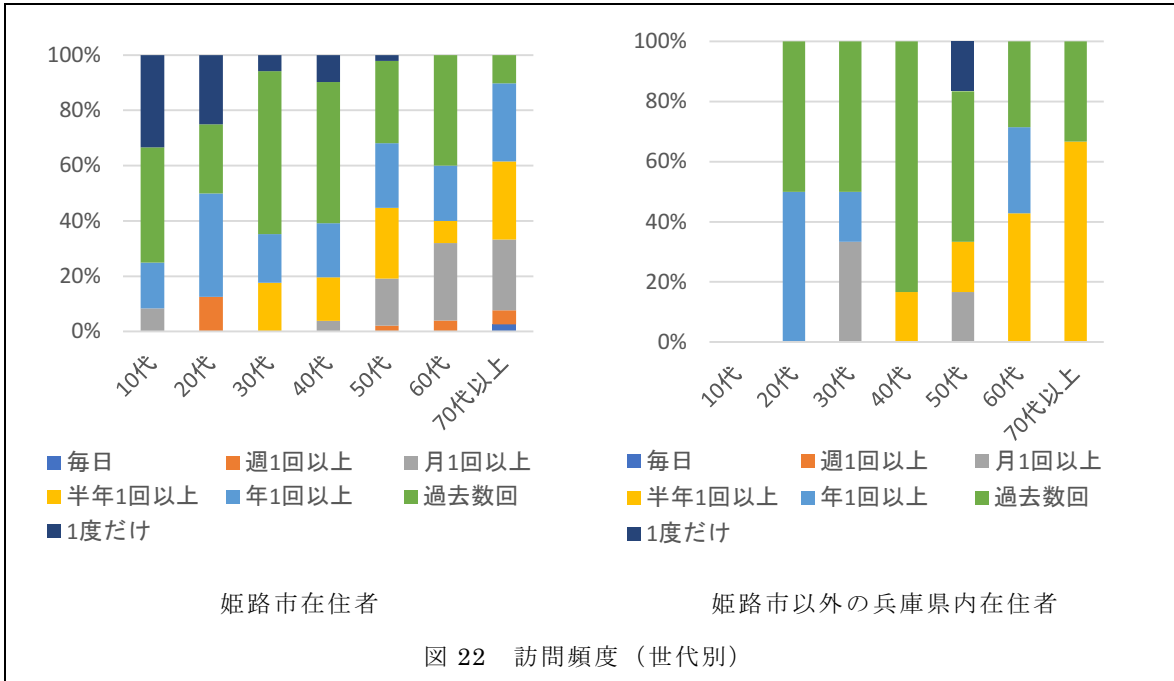
一方、姫路以外の兵庫県内の利用状況を見ると、やはり過去数回という割合が56%となり、半分以上が偶発的な機会にのみ名古屋山霊苑を訪れている。一方で、定期的な訪問をしている層が4割に達する点も注目される。姫路市に血縁関係があり、近隣からの墓参りの利用が推測される。



○世代別の傾向（図 22）

世代別の訪問頻度をみると、地域に関わりなく、年齢が上がるにつれて偶発的な訪問の割合が下がり、定期的に訪問する割合が高くなるという傾向がみられた。年齢が高くなるほど親族・家族のお墓参りの機会が増えるということが一因と思われる。

もう一つ注目されるのは、10代から20代にかけて、過去に一度だけ来たことがあるという回答が多いことである。お葬式の場合、家族であればその後定期的にお墓参りをするはずであるから、親族のお葬式という機会が考えられる。また、後述するように学校行事で来たことがあるというケースもあり得る。しかし、その後、再び訪れようという気持ちにならなかったという点は、「墓地公園」としての名古山霊苑の本質的な意義に関わる問題ではないだろうか。



(10) 訪問理由

○地域別の傾向（図 23）

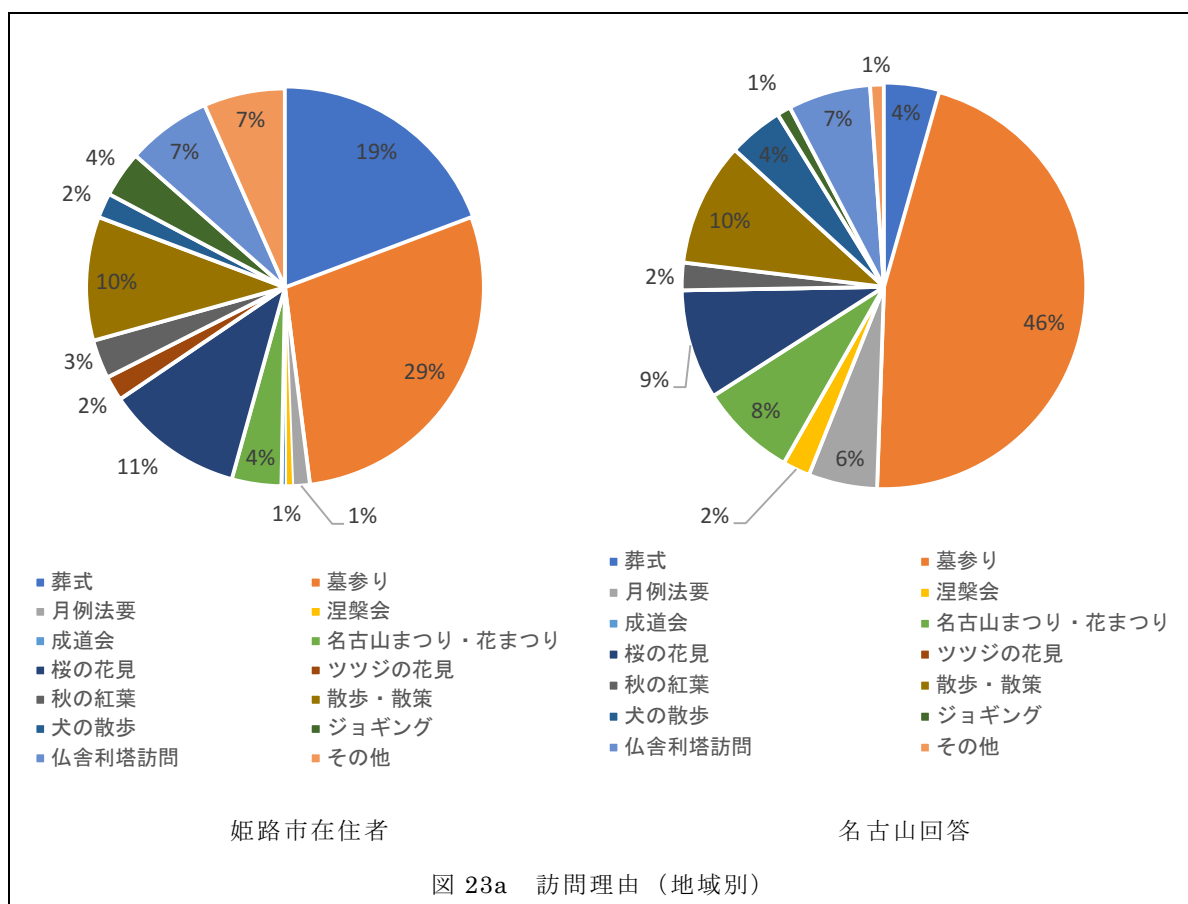
名古屋山霊苑を訪れた理由については、姫路市在住者の場合、お葬式が 19%、お墓参りが 29%となり、「墓地」としての側面での利用がほぼ半分に達する。一方で残りの半分をみると、それ以外に多様な目的で訪問していることが明らかになった。そのなかでは、桜の花見という回答が 11%となり、名古屋山祭りの 4%と合わせると 15%となり、桜の名所として市民に親しまれていることが裏付けられた。ついで多いのが、散歩・散策の 10%である。そのほかツツジの花見と秋の紅葉、犬の散歩、ジョギングといった「余暇活動」での利用を合計すると 36%に達する。このことから、姫路市民のあいだでは、「墓地」という側面だけではなく、「公園」としての側面での利用が確立していることが明らかになった。また、前項の質問で定期的利用が多かった理由としても、お墓参りだけではなく、その他の余暇活動も一因であることが明らかになった。

さらに姫路市在住者の回答を名古屋山回答とそれ以外の回答を分けると、名古屋山回答では、訪問理由がお葬式であった割合が 4%まで減少し、お墓参りが 46%まで高くなる一方で、名古屋山回答以外ではお葬式 24%とお墓参り 22%とほぼ同数の割合となった。名古屋山回答の回答者はやはりお墓参りでの定期的な利用が多いということが裏付けられた。

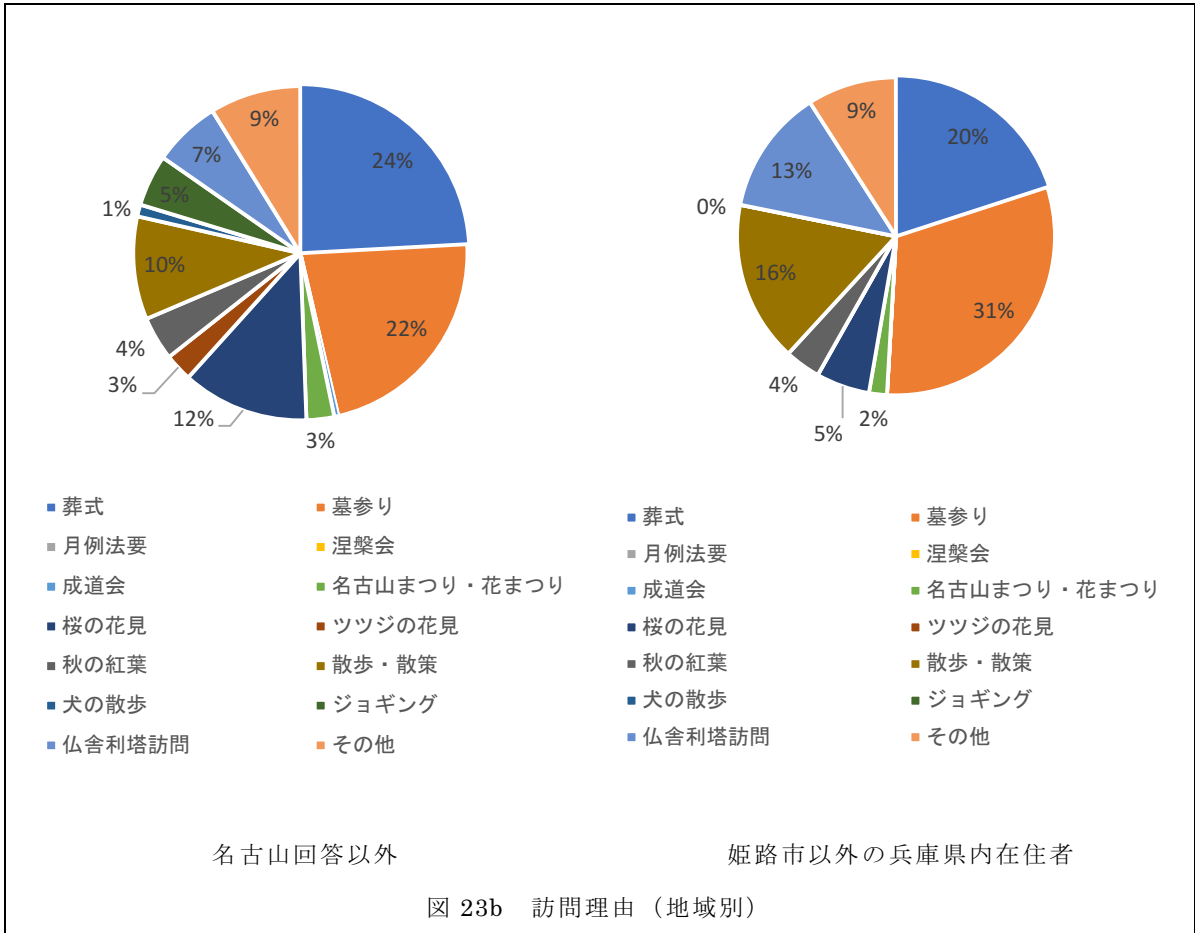
名古屋山霊苑の訪問理由が仏舎利塔の訪問であるという割合は、名古屋山回答とそれ以外の回答のどちらも 7%であった。これは、仏舎利塔を観光対象として認識している人が一定数いるということの意味する。この数字が低いという点が課題であろう。

姫路以外の兵庫県内在住者の割合をみると、お葬式 20%とお墓参り 31%で、やはりほぼ半数が「墓地」の側面での利用を示す結果となった。残りの半分については、散歩・散策が 16%と比較的高い割合となるが、それ以外の余暇活動は種類も少なくなり、余暇活動全体の割合も 27%にまで下がる。このことから、姫路以外の兵庫県内在住者にとって、「公園」の側面の利用価値が意識されていないと推測できる。

一方で、仏舎利塔が訪問理由である割合が 13%となり、姫路市在住者に対して高いことが指摘できる。これは、姫路市在住者よりもその他の兵庫県民のほうが仏舎利塔を観光対象として認識しているということを意味している。

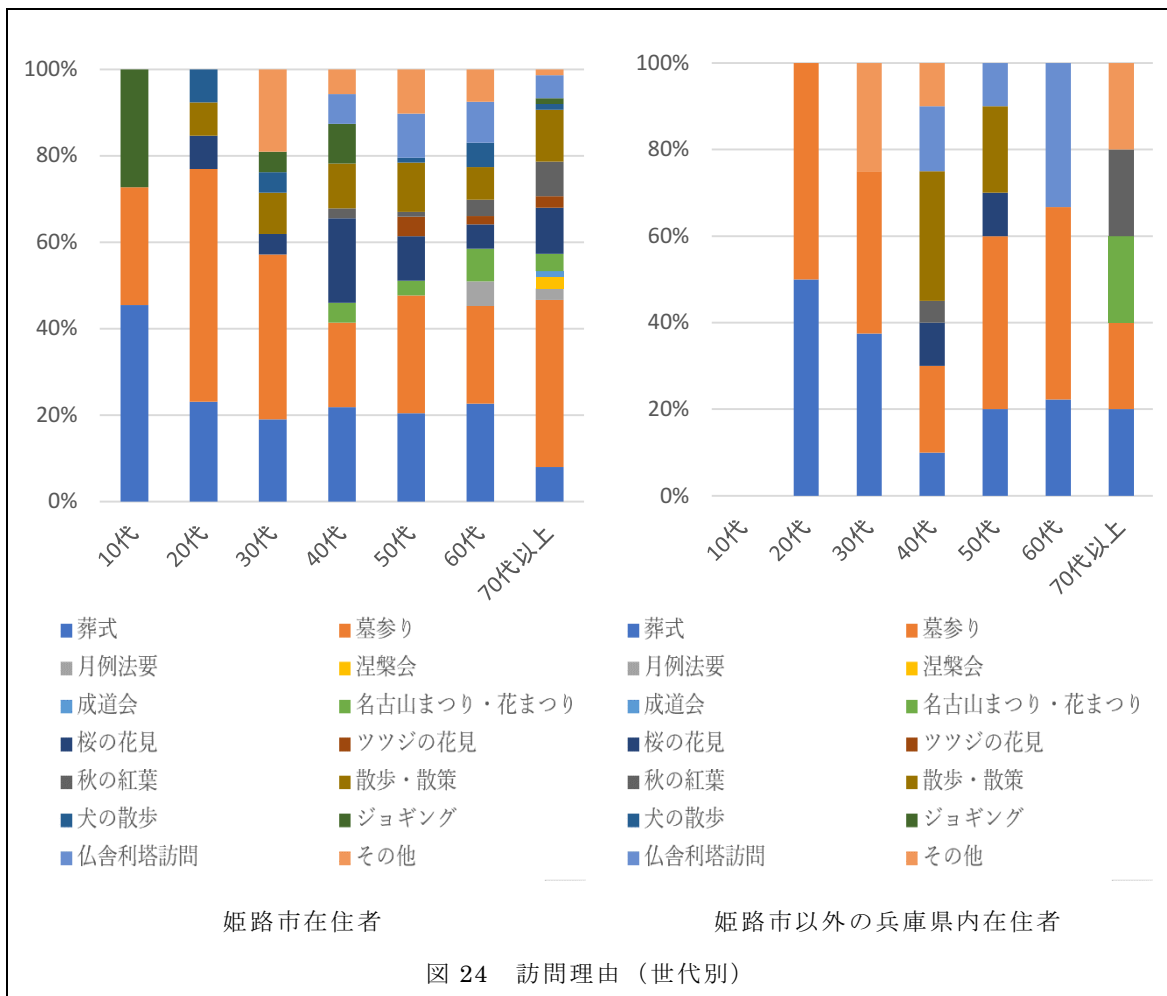






○世代別の傾向 (図 24)

世代ごとの訪問理由を見てみると、地域を問わず、年齢が上がるごとに訪問理由が多様化していることが指摘できる。若年層では葬式及びお墓参りが主目的であるが、年齢が上がるにつれて、花見や散歩、ジョギングといった公園機能につながる用途での利用が増えていく。また、仏舎利塔訪問という観光利用も年齢が高いほうが多くなる傾向にあることが分かる。



(11) 訪問した場所

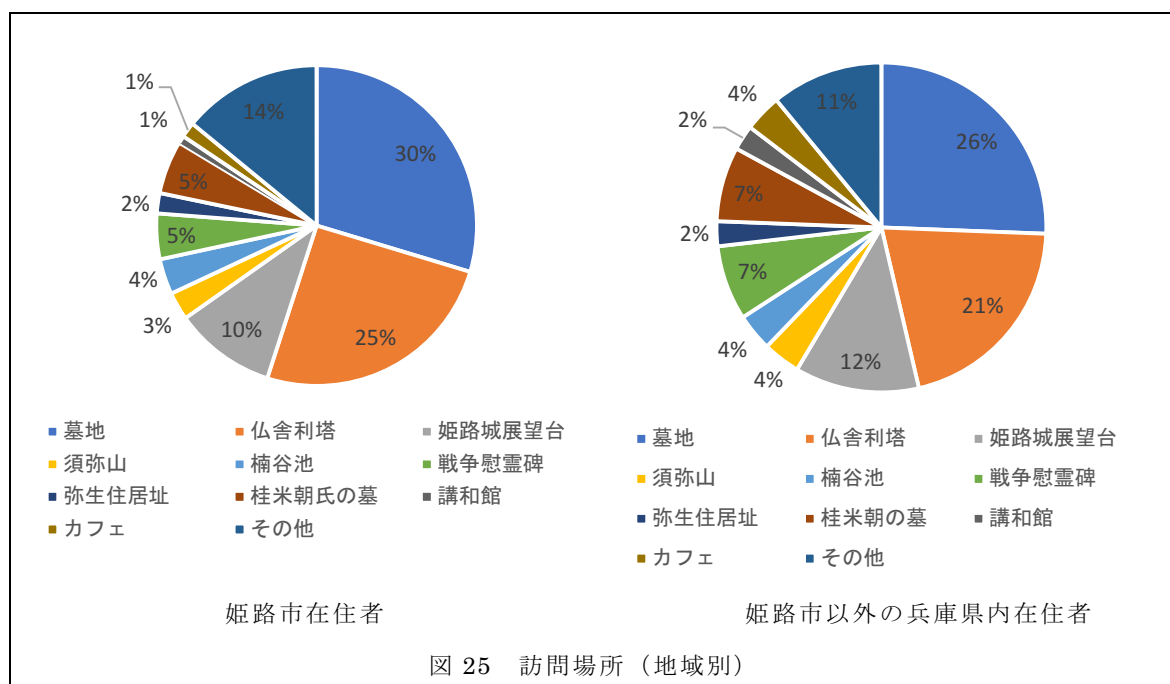
○地域別の傾向（図 25）

実際に名古屋山霊苑のどの場所・対象を訪問したかについて質問したところ、姫路市在住者と姫路以外の兵庫県内在住者のあいだで大きな相違は見られなかった。全体で大きな割合を占めるのは、墓地と仏舎利塔であった。姫路市在住者の場合、墓地が 30%、仏舎利塔が 25%であり、姫路以外の兵庫県内在住者の場合は墓地が 26%、仏舎利塔が 21%である。前項の訪問理由の質問では、お墓参りが圧倒的に多く、仏舎利塔は数%であったが、実際に訪れた対象をみると、墓地と仏舎利塔はほぼ同程度の割合を占めている。この結果から、名古屋山霊苑をお墓参りで訪問した際に、ついでに仏舎利塔に立ち寄ってみる方が多いという利用の形態が見えてくる。

その他の対象については、地域ごとに細かい点での違いが注目される。姫路市在住者では、墓地と仏舎利塔について姫路城展望台の利用が多い。これは、高台にある公園の地形を活かした観光利用の一形態とあってよい。さらにその他利用が 14%となっているが、これは「通り抜けた」という回答がほとんどである。つまり、散歩やジョギングに来た人が特にどこに立ち寄るでもなく歩き回った、という利用形態である。

しかし、これもまた見方を変えれば、名古屋山霊苑の地形と仏舎利塔も含めた景観を楽しむ利用の形態である。名古屋山霊苑は、人の手で創り出された自然と文化の共同作品としての「墓地公園の景観」であり、文化遺産の類型の一つである「文化的景観」ともいえる。そうした価値を楽しむ利用形態として、散策やジョギングといった活動は名古屋山霊苑の利活用の一つの方向性であろう。

一方で兵庫県内となると、墓参り・仏舎利塔・姫路城展望台のほかに、戦争慰霊碑と桂米朝の墓を訪れる人が一定数多いことが分かる。前者は、名古屋山霊苑の前身である陸軍墓地からの系譜につながる名古屋山霊苑の歴史的な意義をたどる利用形態といえるだろう。また後者は、著名人のお墓を訪れるという一つの観光利用の形態が存在していることを示している。最近「墓マイラー」という言葉が使われることもあるが、珍しさで訪れるだけではなく、埋葬されている人の生き方や想いに共感し、尊敬の念を伝えるために訪れる人もいる。これは墓地公園の一つの可能性である。



### ○世代別の傾向（図 26）

世代間の違いをみると、訪問理由と同様に、年齢が上がるほど訪問場所が多様化する傾向が指摘できる。10代から20代までは、お墓参り以外は学校行事で楠谷池などに行く程度だが、20代後半から30代、40代、50代にかけてその他の利用が増える。これは、散歩や散策およびジョギングでの利用が多い世代であることを示している。

また仏舎利塔の訪問に関しては、世代が上がるにつれて訪問した割合も高くなっていくことが指摘できる。つまり、弱年齢層にとってはあまり魅力的な訪問対象となっていない、ということの意味する。しかし一方で、仏舎利塔は中を訪問するだけでは

なく、その価値は外見にもある。つまり名古山霊苑に来るという時点で、仏舎利塔を目にすることは必然であり、その点で言えば、ほとんどの訪問者が仏舎利塔のある景観を“経験”しているということができるだろう。

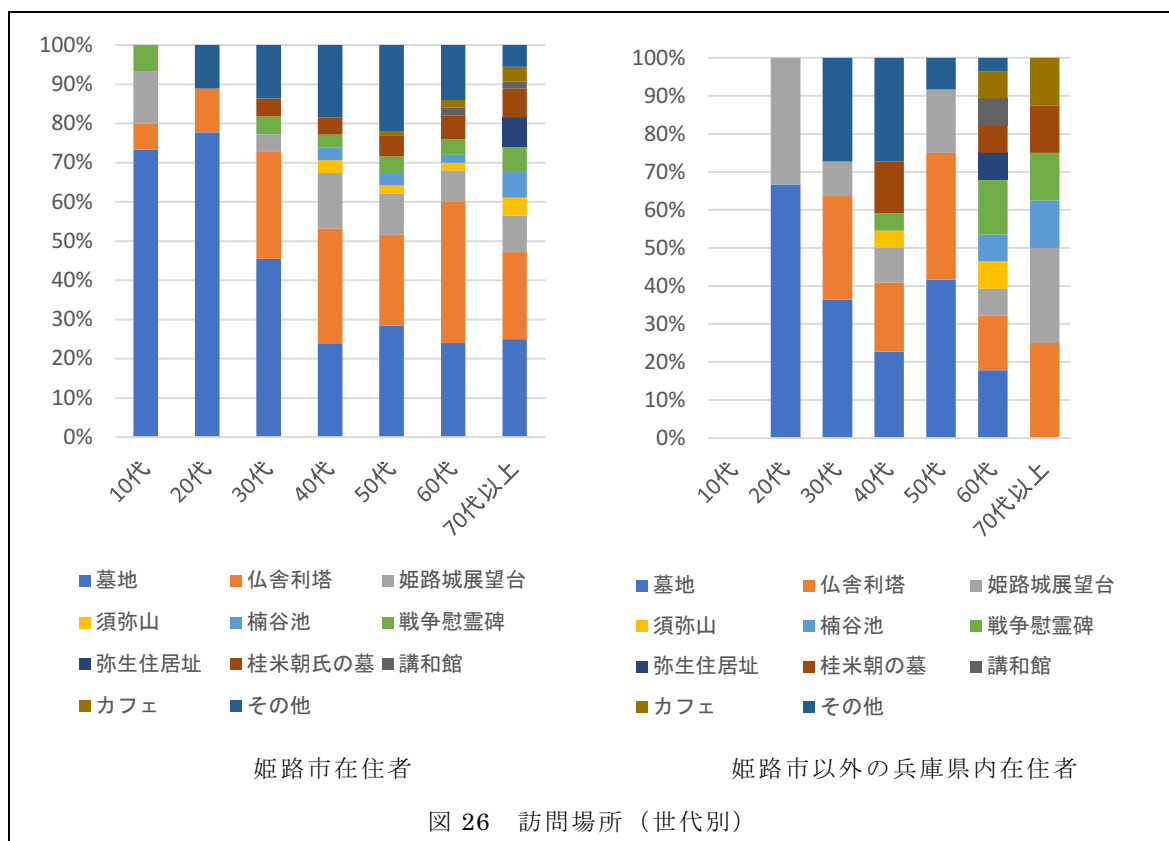


図 26 訪問場所（世代別）

## (12) 名古山霊苑のイメージ

### ○地域別の傾向（図 27、28、29）

名古山霊苑に対するイメージを知るために、最も強いイメージから 3 番目までのイメージを質問した。まず姫路市在住者と姫路以外の兵庫県内在住者の回答を比較してみると、全体の傾向として最も強いイメージはやはり「墓地」という結果になった。しかし、その割合は地域によって異なる。姫路市在住者では 85%と最も強く「墓地」のイメージを持っているが、姫路以外の兵庫県内在住者の回答では 76%となり、「先祖に思いを馳せる場」というイメージは 8%まで増加した。

2 番目に強いイメージでは、回答がいくつかの回答に分散している。「先祖に思いを馳せる場」が姫路市在住者と姫路以外の兵庫県内在住者のどちらも 29%と最も多く、その次に多いのは姫路市在住者の場合は「公共施設」が 19%、「宗教施設」が 13%となるが、兵庫県内在住者では「宗教施設」が 18%、「公共施設」が 15%となり、「公共施設」「宗教施設」を合わせた割合はほぼ同じ程度の割合といってよいだろう。その他の

イメージでは、姫路市在住者も姫路以外の兵庫県在住者も「憩いの場」6%、「花見の場」5%を挙げている。

3番目に強いイメージでは、姫路市在住者では「宗教施設」18%、「公共施設」17%となり、姫路以外の兵庫県在住者では「宗教施設」24%、「公共施設」13%という結果となった。したがって、姫路市在住者では「宗教施設」と「公共施設」というイメージはほぼ同程度かやや「宗教施設」というイメージが強いが、姫路以外の兵庫県在住者にとっては「宗教施設」としてのイメージが「公共施設」よりもやや強いという結果となった。次いで割合が高いのはどちらも「先祖に思いをはせる場」であった。

その他のイメージでは、姫路市在住者の場合は「花見の場」6%、「展望台」6%、「憩いの場」5%であった。一方で県内在住者の場合は、「憩いの場」が11%と比較的高い割合となったのは興味深い。姫路市民に比べて花見で利用することが少ないため、「公園」としてのイメージが先行してくるのではないかと推測される。

続いて、姫路市の回答を名古屋山回答と名古屋山以外の回答に分けて比較する。

両方のグループで最も強いイメージは、やはり圧倒的に「墓地」の割合が高いという点は共通しているが、それ以外のところで違いがみられる。名古屋山回答では「先祖に思いを馳せる場」というイメージが12%あり、単なる墓地ではなく、より埋葬されている人とのつながりを感じさせる質的な空間イメージを持っていることがわかる。さらに注目されるのは、「憩いの場」というイメージの回答が6%見られることである。日常的な訪問によって、「墓地」の側面だけではなく「公園」としての魅力を実感している人が一定割合いることを示している。

2番目に強いイメージではさらに大きな違いがみられる。名古屋山回答では、「先祖に思いを馳せる場」(26%)に続く大きなイメージはなく、憩いの場(8%)と公共施設(6%)が続いている。一方で、無回答が約半数近くに達している。これは、定期的に霊苑を訪問することで視覚的に「墓地」のイメージが固着してしまい、逆にその他のイメージがわからない状態にあるのではないかと考えられる。一方で、「憩いの場」を挙げる人が一定数いることは、やはり日常的に利用することで機能の面から「公園」としてのイメージを感じていることがうかがえる。それに対して、名古屋山回答以外では、「先祖に思いを馳せる場」30%に続いて「公共施設」22%、「宗教施設」15%となり、イメージが分散していることが分かる。これは、見方によっては名古屋山回答の人に比べてより客観的に名古屋山霊苑を捉えているともいえるのではないだろうか。また

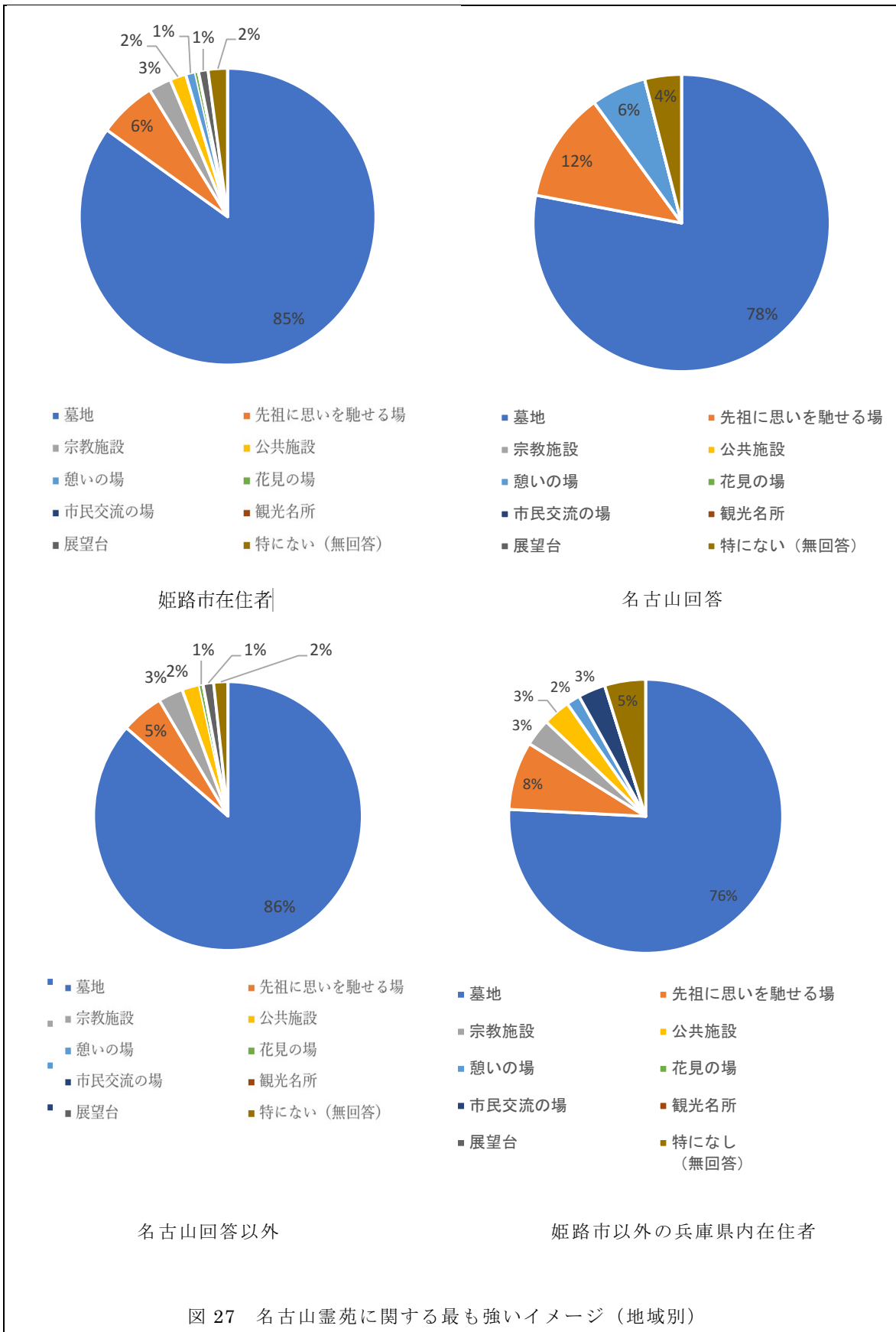
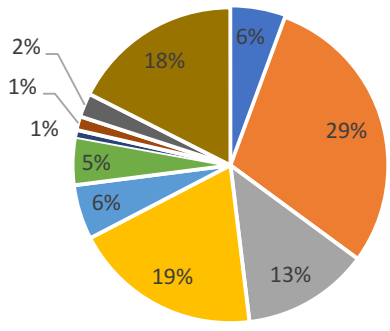
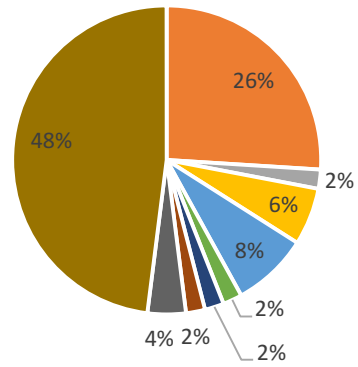


図 27 名古山霊苑に関する最も強いイメージ (地域別)



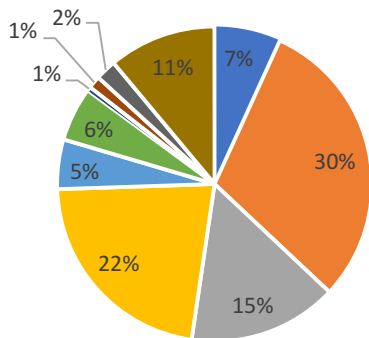
- 墓地
- 先祖に思いを馳せる場
- 宗教施設
- 公共施設
- 憩いの場
- 花見の場
- 市民交流の場
- 観光名所
- 展望台
- 特になし(無回答)

姫路市在住者



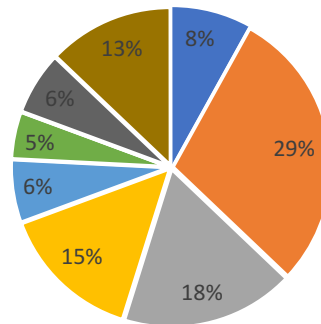
- 墓地
- 先祖に思いを馳せる場
- 宗教施設
- 公共施設
- 憩いの場
- 花見の場
- 市民交流の場
- 観光名所
- 展望台
- 特になし(無回答)

名古屋山回答



- 墓地
- 先祖に思いを馳せる場
- 宗教施設
- 公共施設
- 憩いの場
- 花見の場
- 市民交流の場
- 観光名所
- 展望台
- 特になし(無回答)

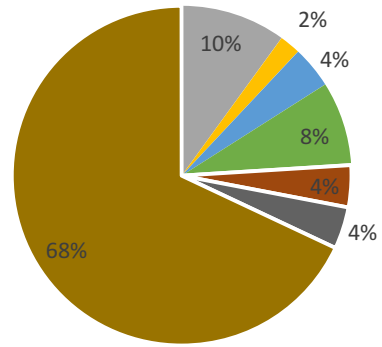
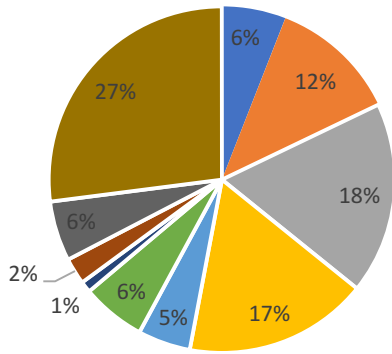
名古屋山回答以外



- 墓地
- 先祖に思いを馳せる場
- 宗教施設
- 公共施設
- 憩いの場
- 花見の場
- 市民交流の場
- 観光名所
- 展望台
- 特になし(無回答)

姫路市以外の兵庫県内在住者

図 28 名古屋山霊苑に関する 2 番目に強いイメージ (地域別)

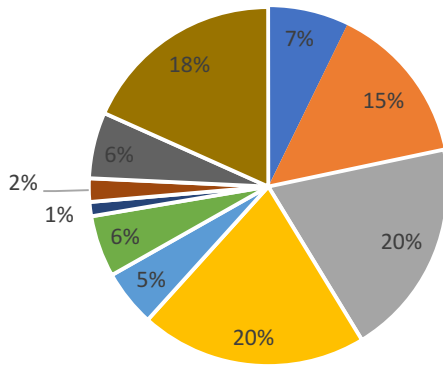


- 墓地
- 先祖に思いを馳せる場
- 宗教施設
- 公共施設
- 憩いの場
- 花見の場
- 市民交流の場
- 観光名所
- 展望台
- 特にない (無回答)

姫路市在住者

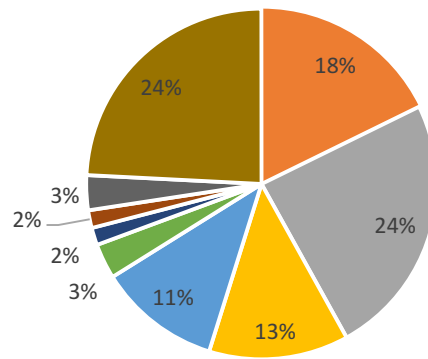
- 墓地
- 先祖に思いを馳せる場
- 宗教施設
- 公共施設
- 憩いの場
- 花見の場
- 市民交流の場
- 観光名所
- 展望台
- 特にない (無回答)

名古屋山回答



- 墓地
- 先祖に思いを馳せる場
- 宗教施設
- 公共施設
- 憩いの場
- 花見の場
- 市民交流の場
- 観光名所
- 展望台
- 特にない (無回答)

名古屋山回答以外



- 墓地
- 先祖に思いを馳せる場
- 宗教施設
- 公共施設
- 憩いの場
- 花見の場
- 市民交流の場
- 観光名所
- 展望台
- 特になし (無回答)

姫路市以外の兵庫県内在住者

図 29 名古屋山霊苑に関する 3 番目に強いイメージ (地域別)



ここで初めて「憩いの場」5%・「花見の場」6%といった公園機能に由来するイメージが一定数見られる。

3番目に強いイメージをみると、名古屋回答では7割近い人が無回答となっており、やはり視覚的イメージの固着の強さがうかがえる。残りの回答は比較的分散しており、わずかに高いものとしては「宗教施設」が10%、「花見の場」が8%の割合を占めている。一方で名古屋回答以外の回答では、「宗教施設」と「公共施設」が同率20%であり、さらに「先祖に思いを馳せる場」という回答も15%を占めている。ある一つのイメージに固まらず、分散しているということは、やはり回答者にとっての親近感・距離感の遠さを意味しているとみるべきであろう。

#### ○世代別の傾向（図30、31、32）

世代ごとの違いを見ていくと、姫路市在住者と姫路以外の兵庫県在住者の間ではあまり傾向の相違はみられなかった。最も強いイメージに関しては、若い世代のほうが「墓地」というイメージを強く持っている傾向がみられた。さらに、10代はイメージがやや分化する傾向があることがわかる。墓地に行く経験がほとんどないため、逆に距離を置いて多様なイメージで捉えられているのかもしれない。40代までは「墓地」イメージが強くなるが、50代以上になってくると、逆に「先祖に思いを馳せる場」というイメージが増えてくる。これは、親や近い人を亡くした後、墓参りを通じて死者を思う経験があるからであろう。

また、名古屋回答では、60代以上の世代で「憩いの場」イメージが強くなる。この世代では、訪問目的の項目で散歩・散策の割合が高くなる世代であり、公園としての機能を実感する世代であることとつながっていると考えられる。

2番目に強いイメージを見ると、全世代で「先祖に思いを馳せる場」のイメージが多くなるが、若い世代では「公共施設」という認識も大きい。また40代以上では、全体的にイメージの種類が増え、公園機能に関するイメージの割合が徐々に高くなる。さらに50代以上では、「憩いの場」としてのイメージが高い。これは、やはり散歩・散策等の公園機能の利用をしていることが理由と思われる。一方で、ジョギング利用が多かった40代は、「憩いの場」のイメージはなく、「花見」や「公共施設」、「宗教施設」といったイメージを強く感じている点は興味深い。

3番目に強いイメージをみると、年齢層の高い方ほどイメージの種類が増え公園機能に関するイメージが多様化する傾向がより明確である。利用目的でも年齢が高い方が種類も多様であり、目的とイメージの関連がうかがえる。40代はここで「憩いの場」イメージが強くなる。

観光名所という回答は全体的に少ないが、年齢が高い方がそのようなイメージを持つ傾向がある事は指摘できるだろう。仏舎利塔も含め、公園機能に即した利用をして

いる世代のほうが、観光目的での活用の可能性を感じているようだ。若い世代に対して、墓地公園はニーズに適しているのか、またはニーズに合うような整備・活用のプランを考えるべきなのか、を検討する必要がある。

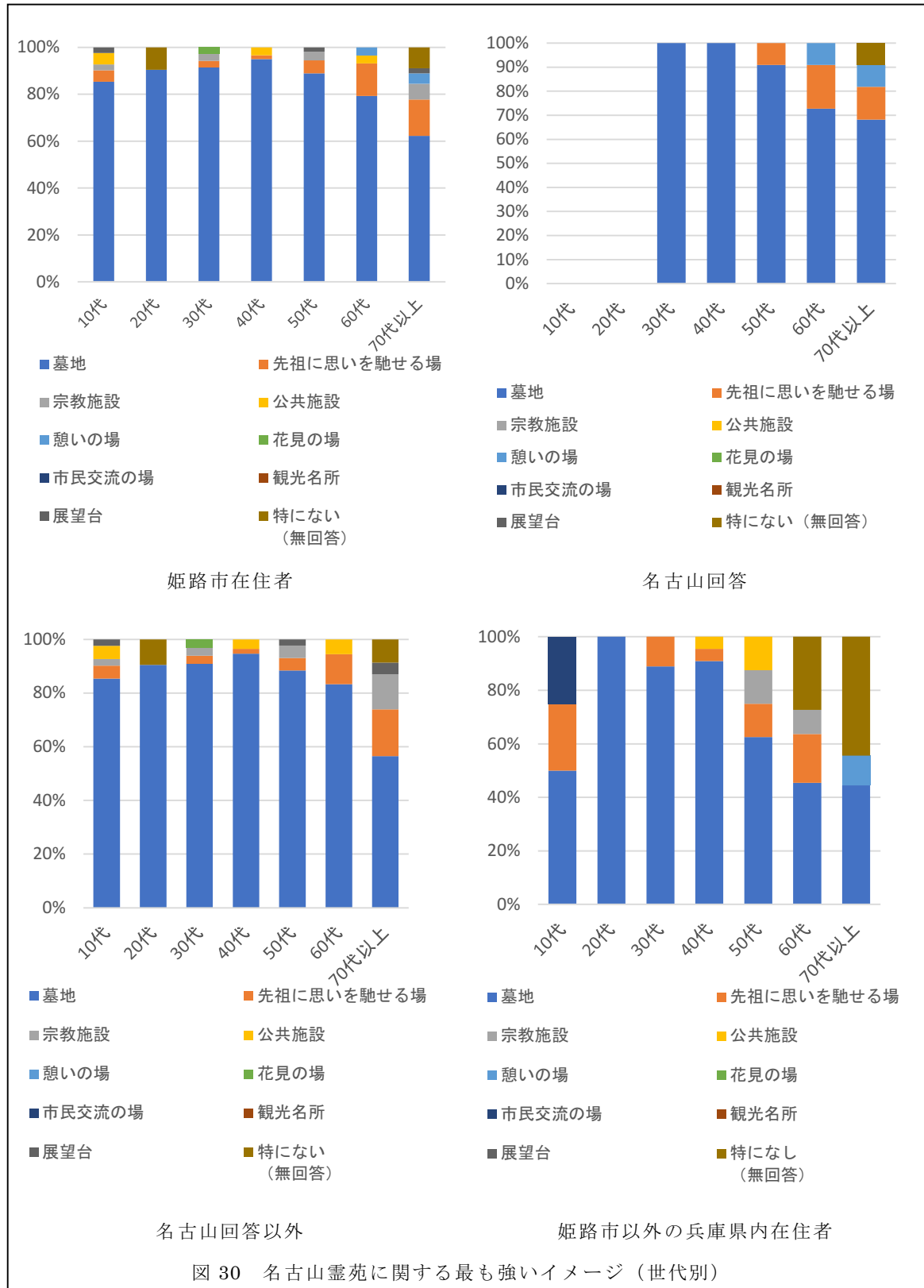
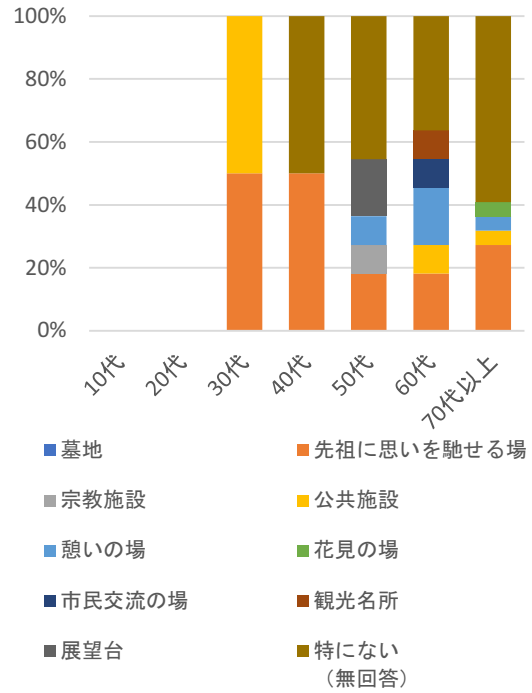
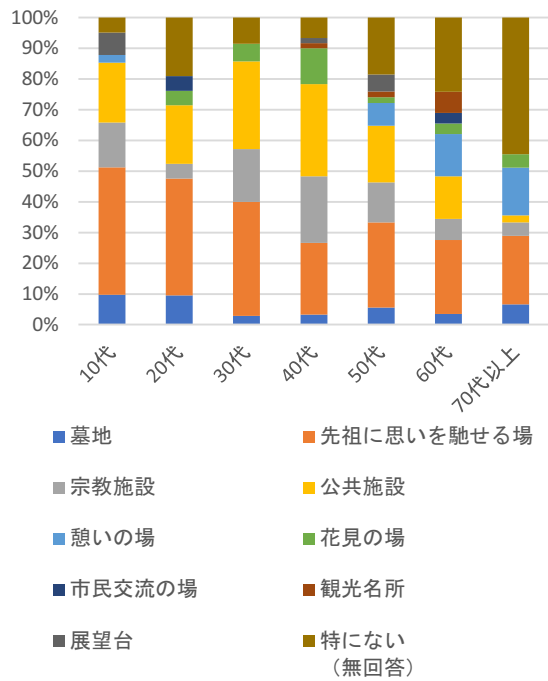
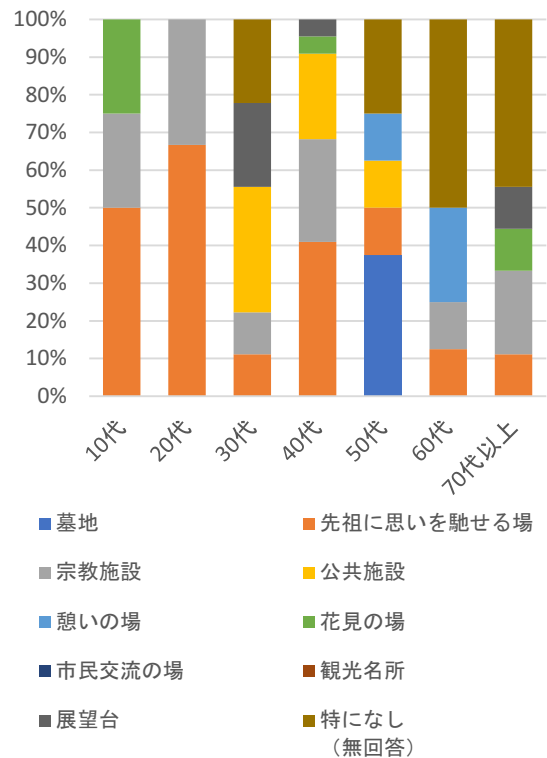
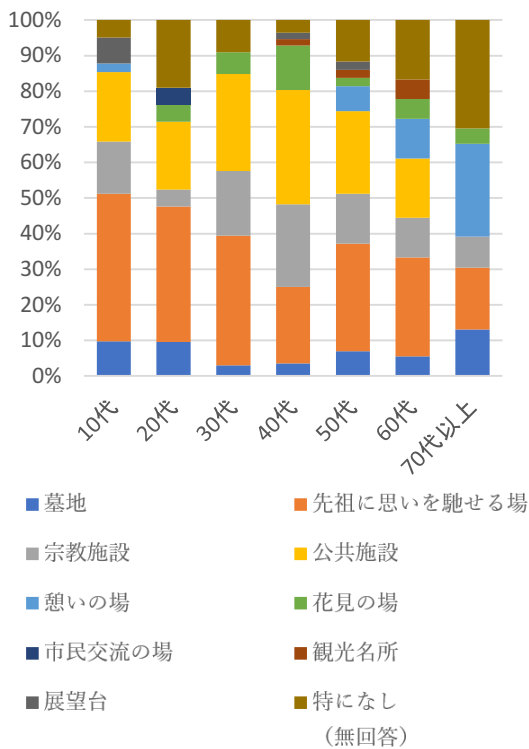


図 30 名古屋山霊苑に関する最も強いイメージ (世代別)



姫路市在住者

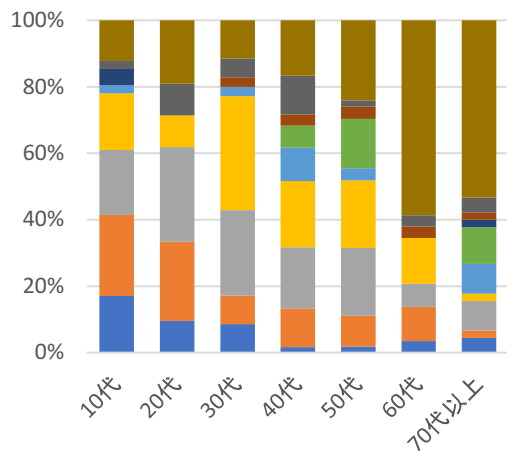
名古屋山回答



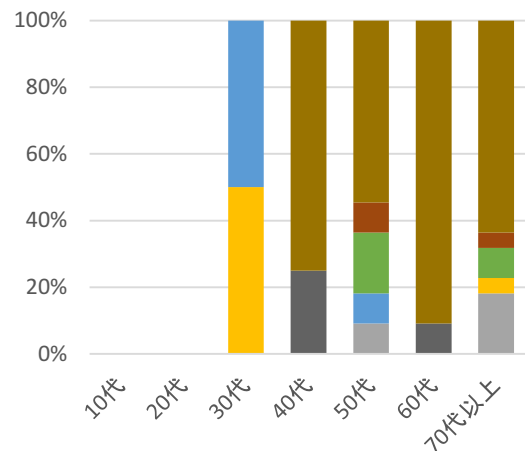
名古屋山回答以外

姫路市以外の兵庫県内在住者

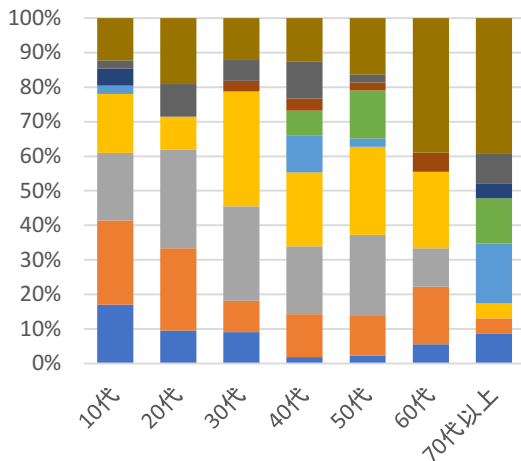
図 31 名古屋山霊苑に関する 2 番目に強いイメージ (地域別)



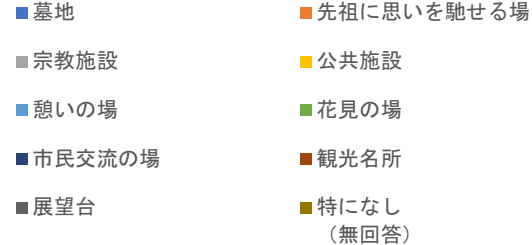
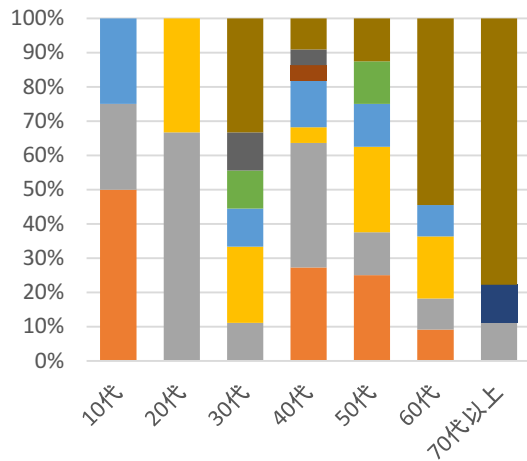
姫路市在住者



名古屋山回答



名古屋山回答以外



姫路市以外の兵庫県内在住者

図 32 名古屋山霊苑に関する 3 番目に強いイメージ (地域別)

### 3.4 結論

今回は、アンケート調査のデータを地理的な観点と世代ごとの違いという観点から、名古屋霊苑を取り巻く現状を分析した。地理的な観点からは、名古屋霊苑および仏舎利・仏舎利塔およびそれに関する情報の認知度は、基本的に姫路から遠くなるにしたがって下がっていくという傾向が確認された。また、名古屋霊苑と仏舎利・仏舎利塔の関係については、兵庫県内外はもとより、姫路市民でも半分ほどしか知らないという結果になった。さらに、世代別な観点で見ると、10代から30代にかけての世代ほど名古屋霊苑と仏舎利・仏舎利塔に関する認知度が低いことがわかった。

また、訪問理由と訪問対象の検証からは、「墓地」としての側面から訪問することが最も多いが、一方でさまざまな「余暇活動」での訪問も多く、「公園」としての機能を利用する市民も多いことが確認された。仏舎利塔に関していえば、訪問する理由として挙げる人の割合は低いですが、実際に訪問した対象としては墓地について多いという結果となった。これは、仏舎利塔は訪問目的としては弱いですが、名古屋霊苑に来たらついでに仏舎利塔にも立ち寄りたくなる、という状況を示している。

これらのことから、名古屋霊苑および仏舎利塔の今後の利活用のためには、利用者の分析をさらに詳細に行い、効果的な広報戦略を立てて情報発信に努めることが必要である。「墓地公園」としての名古屋霊苑の特性に合った利用者のセグメントを決定し、そのニーズに合った整備を行い、訪問してほしい層に的確な広報を行うことが求められる。もちろん、その際に「墓地」と「公園」のあいだで利用者の性質が異なることにも注意が必要である。お墓参りの利用者が求めるものは、埋葬された人に思いを馳せ、冥福を祈り、時には思いを受け取ることのできる『場』であろう。一方で「公園」としての利用者が求めるものは、美しい眺めを楽しみながら歩き、家族や友人と語り、憩うことのできる『場』である。この二つの『場』を両立することによって、名古屋霊苑の「墓地公園」としての特性が磨かれていくと考える。

また、今回のアンケート調査では、名古屋霊苑の価値を適切に再評価することも重要な課題としてみえてきた。その他の都道府県の人々の8割が「訪れたいとは思わない」と回答したことは、名古屋霊苑の価値がきちんと位置付けられておらず、社会的な評価を得られていないからである。

仏舎利は、インドのネール首相から平和を祈念して日本に寄贈されたものであり、戦後の日印友好を象徴する歴史的・文化的に貴重な財産である。また、それを納めるために建築家大岡實が設計した仏舎利塔は、それ自体が芸術的・学術的な価値のある歴史的建造物というだけでなく、藤井日達の日本山妙法寺が中心となって戦後スタートし、現在に至るまで日本にとどまらず世界にまで展開してきた仏舎利塔建立運動につながるものであり、歴史的・社会的な価値は高い。したがって、この仏舎利と仏舎利塔の組み合わせは、姫路市の遺産にとどまらず、戦後日本が目指した世界協調・世

界平和を象徴する日本の重要な歴史文化遺産と位置付けられる。さらに、名古屋山霊苑という「墓地公園」と独特の外観を持つ仏舎利塔が一体化した景観は他に類をみないものであり、文化遺産の類型の一つである「文化的景観」とみなすことができる。

あらためて姫路市民のあいだでこれらの価値を適切に位置づけ、共有するとともに、外部への発信を強化することで、名古屋山霊苑の新たな可能性が開けていくと考える。

#### 注

- <sup>1</sup> 石見元秀氏の市長在職時に名古屋山霊苑に勤務していた桑垣氏によれば、石見市長は折をみて名古屋山霊苑を訪れ、旧管理事務所の展望台に上って周囲を眺め、さまざまなアイデアを構想していたという。(桑垣末男氏インタビューより。2020年9月21日実施)。
- <sup>2</sup> 名古屋山霊苑協会『50年のあゆみ 名古屋山霊苑協会 創立五十周年記念誌』2014年、p.24。
- <sup>3</sup> 石見利勝元市長インタビューより (2020年9月17日実施)。
- <sup>4</sup> 織野祥徳、吉川眞、田中一成 (2008)「姫路城の景観分析」『日本都市計画学会関西支部研究発表会講演概要集』第6号、p.1。

#### 参考資料

石見利勝元市長インタビュー (2020年9月17日実施)

織野祥徳、吉川眞、田中一成 (2008)「姫路城の景観分析」『日本都市計画学会関西支部研究発表会講演概要集』第6号、pp.13-16

名古屋山霊苑協会 (2014)『50年のあゆみ 名古屋山霊苑協会 創立五十周年記念誌』名古屋山霊苑協会



アンケート調査の様子

## 総括〔小磯 学・高根沢 均〕

2, 3 章において検証した墓地公園としての名古屋山霊苑とアンケート調査結果の双方に基づき、以下では全体の総括を行う。

名古屋山霊苑の理念 石見元秀氏が名古屋山霊苑建設の際に掲げた理念とは、この場所を祖先に思い馳せる墓地としてだけでなく、木々と花々で彩られた中を人々が散策し、家族団欒の場として日々寛げる公園とすることであった。それは、18 世紀半ば以降の産業革命による急速な都市の拡大と人口増加によって郊外に新たに設置された墓地にその源がある。それまでの市街地の狭い土地にあった墓地の機能が「墓」に限定されていたのに対し、郊外の新たな墓地は緑に溢れ、自由に散策ができる道が巡らされた「公園」の機能を合わせもつよう当初からデザインされていた。そして宗派や宗教の違いを超えて墓が祀られていることは、多様性の受容と平和的共存といった新しい時代・社会が生み出した墓地のひとつの理想像の具現にほかならず、また死者と生者との新しい関係のあり方の提示でもあったといえる。それらは、名古屋山霊苑に確実に継承されている。

本研究の目的は名古屋山霊苑の歴史的価値の検証とその現代的意義の再検討を行うことであったが、墓地公園のこうした理念の核心に迫り理解を深めることができた。それはもう一つの目的である本霊苑の活用・利用促進を検討する際にも、必然的に重要な要素となる。

霊苑の利用を促す要件 利用促進を検討する際には本霊苑に墓を祀られているご家族の方々とも相談をし、その了承を得ることが前提であるのはいうまでもない。ただその上で、参拝にとどまらない公園としての利用を促進するためには以下の主だった要件を検討する必要がある。

1. 名古屋山霊苑の理念の周知：上述した墓地公園としての理念を、改めて広く社会に周知することが重要である。もちろん散歩する際にいちいちこうした理念を理解する必要があるわけではないが、人々がアクセスしやすい媒体（姫路市や霊苑のウェブサイトや姫路駅の姫路観光ナビポートに置かれたパンフレットなど）に記述をしておくことは必要である。

2. 公園機能の整備：アンケート調査の結果明らかとなったのは、利用者の 4 割が余暇活動を行うまさに公園として本霊苑を使っているという事実である。樹木や花の手入れは大変な労力と費用がかかるという難しさがあるが、ピクニックができるような芝生や木陰、小ざれいなベンチなどを増やし公園としての機能をシンプルに充実させるだけで、さらにそうした利用者が増えるであろう。

3. 戦没者慰霊碑：名古屋山霊苑には複数の慰霊碑が祀られているが、関係者以外には各々に祀られている戦没者がどのような戦場や状況で亡くなられたのか墓碑銘だけではわかりづらい。ビルマ之碑など、「史上最悪の作戦」と呼ばれ世界的に知られるインパール作戦に関わる慰霊碑もあり、わかりやすく各々の墓碑銘の由来を伝えることは戦争の記録・記憶の伝承という点からも重要である。これらを景観の一部として終わらせてはならない。

3. 著名人の墓：数名の人間国宝や姫路市名誉市民だけでなく、たとえば伝統工芸など優れた技をもつ職人やさまざまな形で社会に貢献した方々の墓は名古屋山霊苑にも少なくないと思われる。外面を飾る豪華な彫刻はなくとも、そうした歴史的人物の墓を再発見し新たな参拝者を呼び込む物語を紡ぐことができるかもしれない。墓を祀るご家族の方々に、そうした情報を募る問いかけができないであろうか。

4. 映画・小説等のコンテンツとしての売り込み：パリのペール・ラシェーズ墓地では墓地が多種多様なコンテンツの場となっており、コンテンツ・ツーリズムの「聖地」となっていることが多数の来訪者にとっての「聖地巡礼」になっている。人が集まり過ぎることで生じるさまざまな弊害を十分に考慮せねばならないものの、名古屋山霊苑においても仏舎利塔はもちろん、霊苑全体の景観、楠谷池、姫路城ビューポイントなど可能性は十分にある。この点については、たとえばロケ地となるスポットや景観、建物などの情報提供を積極的に行い大きな成果を上げている神戸フィルムオフィスの例が知られ、参考にできる。

5. 仏舎利と仏舎利塔：戦後の平和のシンボルでもあるこの塔を石見元秀氏は観光スポットとしても位置づけていたが、アンケート結果からも明らかなようにその認知度はたとえ姫路市民であっても若い世代ほど低い。しかしネルー首相から直々に賜った仏舎利を納めたこの塔は、東・東南アジアの仏教徒を中心に重要な聖地のひとつであることは間違いがなく、しっかりと情報発信をすることで世界的な参拝地かつ観光地となる潜在力を有している。

また仏舎利塔は日本建築の大家・大岡實氏の設計によるものであり、建築的な価値も大きい。仏舎利塔は 2000 年以上前にインドで誕生しその後もその形を変えつつ広く東・東南アジア全域に伝播してきた。大岡氏はインドなど現地に直接趣き取材を重ね、歴史的な文化交流と平和の象徴として各地の仏舎利塔の要素を取り入れて設計している。そうした歴史的・文化的景観もまた、観光対象として極めて価値が高い。

上記の要件に関する事項の周知を図るには、必然的に効果的な広報戦略と情報発信が重要となる。ウェブサイトの利用が効率的であろうが、姫路城と同程度に多言語表記で世界を相手に発信することが名古屋山霊苑の可能性を広げていくと確信する。



## 謝辞

本研究助成プロジェクトは、姫路市とともに関西国際大学の両者から支出して頂いた助成金によって調査を進めることができました。

また調査や聞き取り、アンケート調査については、下記の方々に大変お世話になりました。この場をお借りして、深く感謝申し上げます。

石見 利勝 様（前姫路市長）

柳谷 耕士郎 様（姫路市 市長公室 企画政策推進室 参事）

定 美津穂 様（同 主事）

篠原 亮子 様（同 係長）

船曳 幸雄 様（姫路市 市民局 市民生活部 名古屋山霊苑管理事務所 所長）

大川 毅 様（同 事務所職員）

福井 孝幹 様（同 事務所元所長）

桑垣 末男 様（同 事務所元職員）

日比淳英 様（覚王山日泰寺／名古屋市）

武田 隆雄 様（日本山妙法寺 渋谷道場）

菅原 昭治 様（宗教法人 富士仏舎利護持会／御殿場市）

天田 文治 様（妙光山感應寺 住職／御殿場市）

天田 真寛 様（同 副住職）

天田 嘉恩 様（同 副住職）

姫路市役所職員・姫路市民・姫路市を訪問された多くの方々

中島暖華さん・松崎琳さん・三木麻奈未さん・矢田優香さん（関西国際大学学生）

有難うございました。



ご協力、有難うございました！

## 名古屋山霊苑の歴史的価値の検証と現代的意義の再発見プロジェクト

編集：関西国際大学 地域総合研究所 名古屋山霊苑活用研究グループ

発行：2021(令和3)年3月19日

印刷：キンコーズ・ジャパン

〒651-0096 三宮店兵庫県神戸市中央区雲井通 4-2-2

マークラー神戸ビル 1F

Tel:078-291-6732